

○質問者 まず、テレビ会議の内容、これは3月12日の22時50…。

○回答者 3月12日の22時ですから、1号機のことですね。

○質問者 これを見てみると、補正して22時59分からで、録音が録られているときも、録られていないときもあるんですけども、残っているところで、主に意思決定に関わるようなところ。関わるようなところというのは、特に、それによって意思決定が左右されたところもあれば、そうでない部分もあって、とにかく、所長がある重要な局面の中で何か判断をされるときになされた会話とか、その辺を中心にしてピックアップをさせてもらっているんですね。それを順に見ていただいて、記憶の喚起を込めてですね。

まず最初が、3月13日の未明ぐらいの出来事で、HPCIが13日の2時42分に3号機が停止をしました。その後、3時50分とかぐらいになっていて、DDFPを入れようにも、当時、原子炉圧力が4.1MPaぐらいになっていて、ちょっと入らないなというような状況のころの話で、ここを抜粋した趣旨は、要するに、HPCIが停止して、DDFPを入れるというようなタイミングのことだとか、あと、DDFPはどれぐらいだったら入るんじゃないかとか、消防車のポンプだったらどうなんだろうというような議論をこのころずっとされている記録が残っているんで、その辺を見ていただいて、そのころの状況を思い出していただきたいと思います。では、お願いします。

(録画部分)

「これから、ちょっと変わったことがあったんで連絡しますけれども、3号機」

「はい、3号機」

「HPCIが2時44分に一旦停止しました」

「2時44分、一旦停止、はい」

「炉圧が低いんで、RCICは運転しないで、そのときは炉圧低かったんで、DDの消火ポンプを起動しまして、これで注水しようとしてました。しかし、この時点でDDの消火ポンプは0.61MPaぐらいしかなくて、入りませんでした。3時44分ちよいぐらいのデータを見ると、炉圧が、HPCIが停止した後で、その前は0.7メガぐらいのものが4.1メガまで、5倍以上上がっているんですよ。7キロから41キロ。これを超えられると、どういうあれなのか、今、確認していますけれども、炉圧が上がっていると。それで、今、もう一度HPCIが回らないかとか、代替の注水手段を確認しているところなんですけれども、ちょっと3号はトランジェントな状態なので」

「はい、わかりました。了解です」

○ 次のところも続けていいですね。

○質問者 いいですよ、そのまま。

(録画部分)

「保安班から、今朝方までのモニタリングポストのデータについて情報を共有しておきます。MPの8番付近にあります（・・・）のデータで、 $4.5\mu\text{Sv/h}$ 、2時50分です。正門、2時50分で $3.14\mu\text{Sv/h}$ です。変化はございません。正門でのダストですが、1時45分～2時05分で確認をしておりますが、ダストで $6.4^{-5}$ ベクレル/ $\text{m}^3$ 。希ガス、ヨウ素関係では検出限界以下です。MP4におきましては、3時08分で $39.6\mu\text{Sv/h}$ ということで、ここについても大きな変化は見られておりません。以上です」

○質問者 次も入れてしまっていていいですよ。

○ はい。3分ぐらいだと思います。

○質問者 これは3時59分ですね。

（録画部分）

「これは何に使おうとしているんだっけ。3号機の電源をそこで何かつけるの。電源のところでつけるの」

「DDFPは3号も生きていて、その突出圧が5キロ、6キロなんです。それに対して、消防のポンプは10キロ以上あるんで、炉圧か下がってきたときに、電源低いよりも容量が高い圧力で、高い容量の給水が（・・・）」

「それぞれのラインに消火ポンプを入れてしまうわけではないだろう。悪いけれども、大至急、■■■■さんと調べてくれないかな」

○質問者 一旦止めますけれども、今、3時50分台の、3時52分ぐらいから4時前ぐらいまでの間、■■■■さんの話のところまで、10分ぐらいの間に、途中ちょっと保安班の情報が入りますけれども、ここで言われているのが、要するに、HPCIが停止した後に、炉圧との関係でDDFP入りませんでしたと。DDFPというのは、最後の方で■■■■さんがおっしゃっているところが、突出圧が5キロ、6キロなんです。みたいな話があって、要するに、DDFPというのは、0.5メガ、0.6メガぐらいの吐出圧しかないということは、炉圧がそのぐらいまでであると、もう入らないという状況になりますね。その辺との関係で、DDFPはもともと生きていたということであれば、その前の段階で、ぐーっと上がるよりも前の段階で、入れようとしていたことというのはないんですか、現場の方で。

○回答者 DDの件は、前も申しましたように、起動しておいて、要するに、圧力バランスが勝てば入るわけです。勝たなければ入らない。単純にシステム構造、それだけなんで、起動さえしておけば、チェック弁の圧力バランスだけです。このタイミングは頭の中ですっかり忘れていたんですけども、運転側が、一部の者でしたけれども、DDを希望したらいつでも、圧力バランスをあれしたら入れるように準備をしていたんです。それが、結局、入っていないと。炉圧が下がってもですね。そういう話になったと思うんですね。ですから、0.8になったから、そこで起動させて入れたというよりも、その前から準備

備はしておいて、圧力バランスは結局、負けているんで、入りませんでしたという説明を  
[ ] がしているところです。

○質問者 DDFP で吐出圧というのは、どの段階なんですか。ポンプの辺りのところ。

○回答者 そうです。ポンプの（・・・）

○質問者 そうすると、例えば、そこからまた炉のところに行くまでに圧が下がる可能性はあるんですか。

○回答者 ですから、チェック弁があるわけですね。こっちの圧が高ければ、こっち側の圧が高い方から入るし、こっちが高いときはこっちに戻さない、止めてしまうという、こういうバルブですから。

○質問者 私の素人の考えで、これはどういう状況なんですか。計測する、DDFP の性能を言うときの吐出圧が5キロ、6キロというのは、炉に入る段階での圧が、そこが今回、6ということですか。

○回答者 そうです。DD のものは別に圧力計がついているわけではないんです。ですから、通常のポンプ性能から言うと、実際、吐出圧はそれぐらいで、チェック弁の取り合いのところで、流れがなければ圧が込もっていますから、同じ圧力なんです。流れが出た途端に最大圧損分が出てきますから、そのバランスが出てくるんですけども、いずれにしても、チェック弁のこのポイントで、どっちの圧が高いかというだけの話ですから。ポンプそのものの吐出圧と言っているのは、ここはどうか分かりません。圧力計もあるわけではないですから。ただし、DD のポンプそのものの吐出圧がせいぜい5キロ、6キロぐらいですから、成り行きなんですよ。この圧力バランスについては。

○質問者 そうすると、この DDFP というのは、水源からの水量もそうだし、吐出圧の点においてもそうなので、所長としては、この前からおっしゃっているけれども、そんなに信頼を置いていなかったというのは、これで勝負をかけるのはなかなか厳しいだろうと。

○回答者 厳しい。

○質問者 実際、最後の方の流れを見ると、この状況は7キロから41キロに炉圧が上がってきていて、どうも [ ] さんの話だと、消防のポンプが10キロ以上あるんじゃないかというような部分もあって、そうであれば、そちらの方で切り替えてやっていけば、あるいは減圧操作していけば入るのではないかというところで、消防とかを監督している [ ] さんに調べてくれないかというような、このころの話になっているということなんです。

○回答者 そうです。

○質問者 その次が、それから40分ぐらいたった5時44分ころのお話で、このころから、消火栓とか消火ポンプとか、注水の関係の話で、海水を入れるとか、淡水にするとかいう話がこれからずっと続いていくんですけども、これを聞いていただきますので、まず、5時44分からのものをお願いいたします。

(録画部分)

「要は、でっかい消火栓のタンクが全部空で、2～3立米のものしか残っていないんですよ。海水からタンクいっぱい来ているんですけども、どうします」

「もう海水入れてしまうしかないでしょう」

○回答者 これは■■■■ですね。

○質問者 ■■■■さんですか。止めてもらっていいですか。■■■■さんは吉田所長の隣に座っておられたんですね。これは、消火栓とか消火ポンプは間に合うんだけど、水源が、「でっかい消火栓のタンクが空で」という、この「でっかい消火栓のタンク」というのは。

○回答者 これは多分、防火水槽のことを言っているんだと思うんです。

○質問者 ろ過水タンクではなくて、防火水槽。

○回答者 はい。

○質問者 それがもう2～30分しかない。水がないんだったら、もう海水入れるしかないだろうというようなところになったんですね。

○回答者 はい。

○質問者 これは3号機への注水のことをずっと話している場面ですね。

○回答者 はい。

○質問者 では、ちょっと話が飛んで、3月13日の6時14分と手書きで書いてあるところ、05のところですね。

(録画部分)

「今、言っているのは、各到達は、今、予想では5時30分と言っているんだけど、3号機は到達しているんですかという質問なんだけど」

○質問者 この後ですね。この次が大体、6時43分とか、そのころからですね。

(録画部分)

「吉田さん。ドライウェル圧力を今の状況でもう一度見直して、引き続きベントの時間の再評価します」

「緊急です。緊急割り込み。■■■■君、■■■■君。吉田所長、吉田所長、聞こえますか」「吉田さん。吉田所長」

「はい、吉田です」

「首相官邸から電話かかっているんで、電話転送しますんで」

「はい。どこに」

「吉田さんのピッチに」

「内線の■■■■■をお願いします。■■■■■よ。■■■■■」

「サイトさん、通話つながりましたか。サイトさん、今、本店ですけれども、今、保安院の緊対室からなんですけれども、ラブチャーに、いいですか」

「はい、どうぞ」

「ラブチャーに頼ると、ベントするのが遅れて、かなり燃料損傷のベントにどんどんなってしまうので、今からもうラブチャーを破いておいてバルブ開けるということは、今、対応可能ですか」

○回答者 ばかな質問だね、これは本当に。技術わかっていない、このばかが。

○質問者 この破るというのは可能なんですか。

○回答者 できませんよ、こんなの、外から。ばかじゃないか。

(録画部分)

「済みません、今、AO弁を開けるために鋭意努力しています。あと30分ぐらいだと思います」

「早くベントしたって、燃料壊れる量に変わりはないよ」

「技術班からです。現在のドライウェル圧力の推移から、最高使用圧力と限界圧力を、最高仕様圧力は7時50分、限界圧力は13時30分の予定です。非常に上昇速度が早い状況です」

「済みません、もう一度確認させていただきますと、1F-3の最高使用圧の到達が8時半から7時50分に変更ということでよろしいですか」

「7時50分に変更でOKです。1F-3の最高使用圧力の到達」

「もう一度確認ですけれども、BCVの最高使用圧が7時50分、限界が13時30分ということでもよろしいでしょうか」

「結構です」

「ベントの外に行かれるのは、あと30分ぐらいかかるということでもよろしいですかね」

「聞こえない。何と言っているの」

「30分ぐらいということで結構です」

「了解」

「官邸から、海水を使うという判断をするのは早過ぎるんじゃないかというコメントが来ました。海水使うということは、もう廃炉にするというようなことにつながるだろうと、こういう話で、極力、ろ過水なり真水を使うことを考えてくれと」

「指示に従って、ろ過水だけで入れられるところからということで、休憩を取りまして、それで順次行きます」

○質問者 ここで一回止めておきますね。今、注水とベントがまさに入り乱れているよう

な状況で、相当、状況としては緊急を要しているという状況がよくわかるんですけども、最後のところまで、しばらく本店とのやりとりが、■■■■さんがやられていて、画面を見ると、一番右側の分割画面の左手の方に所長が映っておられて、その間ずっと電話されていたね。まず、だれからの電話でしたか。

○回答者 多分、まず最初、■■■■

○質問者 東電の。

○回答者 ええ。官邸にいて、官邸から本店に電話がかかってきて、■■■■に転送するという形になったんです。実際、■■■■と話をした後、私、記憶が本当に欠落していて、■■■■からそう指示があったというよりも、だれかに代わったんですよ。代わった相手が今も記憶にないんです。

○質問者 それは東電の人でしたか。

○回答者 ■■■■から武黒に代わったのかと思うんですけども、この時点で細野さんとのホットラインはできていなかったと思うんです。

○質問者 細野さんはいつぐらいからですか。

○回答者 これも記憶がもう、これは13日ですよ。

○質問者 では、遅くともどのぐらいまでには。

○回答者 13日に3号機が爆発しますね。この時点では連絡をしてくれという話が向こうからあった記憶がある。で、連絡したんです。3号機が爆発したときに直接ですね。勿論、テレビ会議でも発話しましたが、直接官邸に電話して、細野さんに電話して、今、爆発しましたという情報を入れたんです。ですから、そこは覚えているんです。

○質問者 それよりも前に細野さんに電話したこととか、あるいはかかってきたと。

○回答者 かかってきたんです。要するに、1号が爆発したときに、情報が全然官邸に流れない。遅かった。東電並びに保安院からですね。2時間ぐらいかかってしまって、プレスする前にNHKの爆発の画面が出てしまって、非常に情報の流れが悪いと。現場の状況を適宜確認するために電話をしてほしいというのと、こっち側にどうやって連絡すればいいんだという話が、これも官邸対応している東電の人間がつながってきて、その電話を代わり代わりした中で、細野さんが出てきて、細野です、これからそういう形で、現場で何かあればこちらの電話にということで、細野さんの携帯の電話番号を教えられて、それから、秘書官の人の電話番号を教えられて、ここに電話してくださいと。それから、こちらから用事があるときはどうすればいいんですかとおっしゃったんですけども、こちらは携帯だとかはダイレクトにつながりません。ですから、うちの本店を経由するなり、官邸の人間に聞いてこちらにつないでもらえるようにしてくださいと言った記憶があるんです。だから、この前にそれがあったかどうか、この後でそういう話になったのか、この前だったのか、ちょっと記憶が定かでない。

○質問者 それは12日の1号機の水素爆発後。

○回答者 後です。それは間違いありません。水素爆発後であることは間違いなくて、3号

機の水素爆発の前であることも間違いないです。そのタイミングで官邸とホットラインをつくりましょうという話があったんですね。

○質問者 ちなみに、今、秘書官と出てきたのは、何ていう方か覚えていますか。

○回答者 そのときの秘書官は、その後もかかっていたのは何と言ったかな。

○質問者 それは細野さんの秘書ですね。

○回答者 細野さんの秘書官。

○質問者 総理秘書官ではなくて。

○回答者 そうではないです。結局、細野さんが全部つなぎをするからということで。途中で秘書官が随分増えたから。結局、秘書官に電話して、とにかくここは私も頭の中で、忘れたいのかどうかわからないんですけども、ほとんど残っていないんですよ、記憶で。ナイトウさんかな。「ナイトウの補佐官、秘書官」と書いてあるから。補佐官のときの秘書官ですから、ナイトウさんかな。

○質問者 では、このときは武黒さんは官邸に、この時期は詰められているんですか。

○回答者 出ていたと思います。

○質問者 武黒さんか、あとは、あるとしたら、可能性、選択肢としては、細野さんという場合もあり得るんですか。

○回答者 あり得ると思うんです。だけれども、細野さんと海水を入れる、入れないの、真水か、あれかという話をしたことがない。記憶にはやはりないんですよ。細野さんとの会話を思い出すとですね。

○質問者 では、ほかの、それ以外の、例えば、この辺だと、話の内容からして、廃炉だ云々という話になると、原子力安全委員会の人とか、そういうような人の可能性はありますか。

○回答者 ないですね。

○質問者 それはないんですね。

○回答者 そのときのいろんなパターンがあったんですけども、細野さんにこちらから電話すると、細野さんが首相のわきにいて、安全委員長がいたりするようなところにもかかるときもありますし、細野さんが一人のところにかかることもあるというような状況だったんで、このときがどういう状況だったか。ここからはかけていませんから、向こうから回ってきたんで、多分、官邸で武黒が携帯使えない、どこにいたか、私はわからないんですけども、まずは■■■■か武黒だと思うんですけども、電話取っていたとは思いますが。そこからだれかに回したか、武黒からの指示だったかは本当に記憶がないです。

○質問者 では、■■■■さんから代わった人がいるわけですね。

○回答者 多分、■■■■はつなぎしかできませんので、海水から真水にしるとか、そういうことは彼の口からは多分なくて、言えるとする、うちの派遣者で言うと武黒からの指示になりますし、そうでないとする、可能性としては細野さんがおっしゃったかぐらいしかないんです。そのときには安全委員会の方と話をした記憶だけはないですから。だから、

二者を択一すると、まだそのとき、武黒だったのかなという。

○質問者の方が記憶は強いという形。保安院とか、そういう可能性は。

○回答者 ないです。保安院の人とは電話はしていなかった。

○質問者 直接はした記憶はないんですか。

○回答者 ちょっと待ってくださいね。一回、安井さんが電話に登場していた記憶はちょこっとあるんですよ。安井さんが出てきたタイミングがここだったかどうかは記憶が定かでない。私の記憶で、官邸としゃべったのは、ジャッジに係る部分は武黒です。それから、報告だとか、官邸の状況で、これはどうなんだという質問に関しては、細野さんと、細野さんが電話を代わって菅首相が出てきたというのがあります。ちょっと待ってください、菅がお話がありますからということで、菅さんが出て、一回だけ枝野さんが出てきたような記憶があります。それ以外で、それは2号機のもうちょっと後ですけども、2号機の減圧注入のときにもろに出てきますけれども、斑目先生が来たというのがあります。それで、中に安井さんが一回ぐらい登場したような記憶はあるんですが、それはここかどうかはわからない。

○質問者 では、何を話したかも余り記憶がない。

○回答者 記憶がない。

○質問者 枝野さんは。

○回答者 枝野さんの話は、ここではなかったです。何か知らないけれども、何か聞いてきたんですよ。細野さん経由で、枝野さんがちょっと質問があるんと言って。大した話ではなくて、現場の状況で、こういうこといいんですかみたいな、多分、プレスをされる前に、ちょっと現場の確認というので電話をかけてこられたような話なんで、要するに、こうしろ、ああしろという指示ではなくて。

○質問者 事実確認。

○回答者 事実確認の電話が1回あったような気がする。

○質問者 菅さんは。

○回答者 菅さんはどっちかという質問です。水素爆発はどういうメカニズムで起こるんだということとか、それは水蒸気爆発と違うのかとかいうような御質問をなさっていたのが1点ですね。

それから、菅さん自身が言っているのは、菅さんのわきに日比野さんという参加がいて、あと、福井大学の副学長がいて、BWRの構造からいって、除熱をする、要するに、原子炉の熱を取るというときに、タービン側に回して熱を取れないのかと、蒸気をですね。ごく初歩的な質問を菅さんがして、私が説明をし始めたら、ちょっと待ってくれ、その質問は日比野さんがしているからということで、日比野さんに代わって、結構忙しいときだったんだと思うんだけど、るる、BWRの構造というのは、こういう事故時に、蒸気と言っても汚れた蒸気ですから、そういうものをタービンで冷やすということにはなっていない、事故時には格納容器を全部隔離して閉じ込めておくというのが設計の基本仕様だ



から、この段階でタービンの除熱機能だとか、タービンを介して復水器の取り付けなどは使えませんという御説明をしたと。それは菅さん経由で、菅さんのわきの参与に言った。それが2点でしょう。

4回ぐらい菅さんが出てきたんです。もう一点は、これはまた結構機微な話と言ったらおかしいんですけども、警戒区域と避難区域、20 km、30 kmの話について、こう決めたけれども、所長はどう思うみたいな話をしてきたんです。知りませんと。こっちは事故操作であれなんで、どれぐらい飛散するかという話は、こちらで計算しているわけではないので、申し訳ないけれども、そこはわからないということですね。本店なり、そちら側の解析しているところで評価してくれと、現場の判断ではないということは申し上げました。

○質問者 これは本店にかかってきて、本店から回されるという感じなんですか。

○回答者 そうです。大体そういうルートで、[REDACTED]に、固定電話の方に本店経由でかかってくる。

○質問者 菅さんからの電話というのは、質問みたいな感じ。こうしろとかいう意味ではなくて。

○回答者 そうですね。菅さんから直接こうしろという指示をもらったことはないです。どちらかという質問で、今、自分はこういうことを考えているけれどもとか、さっきの水素爆発で、こういう事象はどういうこととか、主として質問ですね。

細野さんとは何回もやりとりしているんですけども、細野さんには、こちらから電話するときには、現場の状況ですね。先ほどの3号機の爆発もそうですけれども、今、こうなっていますとか、ちょっとトランジェントがあったときに、こんな状況ですということを、こちらから現場の状況を、勿論、テレビ会議でも発話するんですけども、発話した後、こんなふうになっていますというお話をすると。向こうからもやはり質問ですね。向こうで議論していて、現場がどうだとかという話になったときに、そこはどうなんですかとか、どれぐらい余裕があるんですかとか、その辺の質問が多かった。これが結構ヒントが多かったんで、どのタイミングか覚えていないんですけども、いずれにしても、細野さんからも指示はなかったです。

○質問者 そうすると、内容的には。

○回答者 だから、多分、武黒から、指示という意味では、だと思ふ。だから、可能性として、武黒が1点と、そのわきで安井さんかだれかがそれに関しておっしゃった可能性も否定できないんですけども、せいぜい絞るとすると、そんなような感じで、武黒か、そのわきにいた安井さんというぐらいしか考えられないなという感じなんです。

○質問者 13日の6時台に官邸から本店へかかって、それが回されてきて、電話を取って、要約すると、海水を使うという判断が早過ぎるのではないかというコメントが来て、海水というのは、それを使うと廃炉にするということにもつながるだろうし、極力、ろ過水とか、水を使うことを考えてくれというような内容なわけですね。

○回答者 ここは、申し訳ないけれども、この前も話したように、私の記憶は全く欠落し

ていたの、ビデオを見て、ああ、そうだったかなと逆に思い出しているぐらいなんで、本当にだれと電話したかも完全に欠落しているんです。ですから、そこは可能性だけの話しかないです。

○質問者 これを見ると、1つ前のところでは、海水を入れてしまうしかないだろうという、もう水も余り残っていないからというところで、そういう話になっていたのが、官邸から電話があって、極力、真水を使うということを考えてくれということなんで、ろ過水だけで入れられるところからやっていくという、■■■■さん、(・・・) あれは入っていましたけれども、そういうことで、急遽、現場の人たちは、恐らく■■■■さんからだと思っただけでも、指示があって、そこをまた変えていったらしいですね。防火水槽タンクはどこにあるんだという、瓦れきや何かでマンホールのふたが埋まっていたりするんで、みんな探しているらしいんですよ。それで、ここここは使えるんじゃないかというので通してやったというような話のようなんですね。彼らも、最初つくっていたのが急に変わったんで、よく覚えているみたいですね。1つは、ここで、だれかというのは、恐らくタケグロさんなりは御存じなんでしょうから、その辺は聞けばまたわかると思うんで、一応、こういう話はビデオであるわけですから、6時47分ころにそういうことがあったということになるわけですね。

それで、注水のところなんですけれども、この次がQ8番。これはまだ淡水を入れていくところですね。9時10分のところの話です。

(録画部分)

「もうベントされているものと思われたと。」

「次にこのプロジェクトで重要なのは、水源80tしかないから、この80tがなくなる前に、SLCなり、次のステップを引き入れないといけない。それから、もう一つは、この80tをどんどん増やす。人海戦術でも何でもいいから、水をいろんなところから持ってきて、このタンクに入れるという作業に移ってほしいんだ。今、退避してから、OK? 済みません、3号にサポーターは。今、入れに行くように指示しました。80tに(・・・)ように今、指示しました」

「400キロ」

「400キロ」

「SLCの方はスタンバっているんでしょうか、1Fさん」

「SLCはまだ時間がかかるんで、減圧操作行ったんで、時間かかります」

「それは並行して、いつでもできるようにしてください」

「どちらかというと、今の状態の中で、メーキャップの水を確保する方が現実的だと思います」

「了解。水の確保最優先」

「1Fさん、済みません、本店ですけれども、保安院に連絡するに当たって、FPを何時

に注入したか、時間を教えてください」

「FP 注入の時間、9 時何分」

「後で連絡します」

「お願いします」

「海水も考えないといけないんじゃないの。これ、官邸と御相談ですか」

「済みません。プラントの情報の 1 個ですけれども、先ほど申しました（・・・）」

「済みません。今、3 号機は、SLC、冒頭は入れたんですが、海水はなしで、真水を集めてきて、タンクで上から入れつつ、こっちでは考えています」

「吉田所長、水はどこから今、持ってくるのか、ある程度めどは立っているんですか」

「例えば、模擬プールの中に水があるではないですか。ああいうのを人海戦術というかわからないけれども、小さいタンク、（・・・）するなり何なり、すべて使える水を使うということで今、考えています」

「昨日の自衛隊が 3 台来ていたようなものをまた頼みますか。オフサイトセンター」

「それは朝から頼んでいるんですけれども、なかなかあれなんです。昨日から水系は全部放出しているんですけども、何でもいから持ってきてほしいんです」

「では、オフサイトセンターでできることは」

「済みません、オフサイトセンターなんですけど、昨日、水を持って途中まで行ったんですけども、そこで爆発を彼らは実際に目撃されていて、（・・・）持って行ったんですけども、かなり外部被曝、汚染があつて、自衛隊の方はかなり受けてしまったので、そういう意味で、多分、自衛隊の方がそっちに行くというのは難しい状況になりつつあります」

「本部の総務班の■■■■ですけれども、自衛隊につきましては、こちらでも改めて要請をしておりますので、しばらくお待ちいただきたいと思います。窓口はオフサイトセンターを通してやりますので」

○質問者 その辺ぐらいままでちょっと。これは 9 時 10 分ころの話ですので、ちょうど減圧操作をして、9 時 20 分に水を入れるというころの、間際の話で、結局、いろいろかき集めてみて、現時点での水源というのが 80 t 程度というところで、所長の御判断としては、これがなくなる前に、SLC なり、次のステップということで考えておられると。まず、サイト内にある水は何でもかき集めてくるということが 1 点と、もう一つは、よそから水を補給するということで、何とかならないかということなんですね。9 時過ぎぐらいのときの水源として、このときは、とりあえず官邸の方から言われていることもあつて、まず淡水でかき集められるものは全部かき集めるということを最優先課題と。どうしても全部なくなれば。

○回答者 基本的に、最初に言ったみたいに、もう海水しかないだろうというのは変わっていないんです。ただ、極力真水でと言っているんで、真水で対応できる範囲は真水でやりましょうということが 1 点。それから、これは（・・・）になるんですけれど

も、早くホウ酸入れたいというのがあった。ホウ酸入れるのは淡水でタンクに入れた方がやりやすいのはやりやすい。コントロールしやすい。それも頭に入っていたというのはあると思います。だけれども、どこかで淡水がなくなったら、海水はやむを得ないなというのはずっと思いつつ、極力、真水努力、できる範囲はしましろうと、こういうことですね。

○質問者 途中で、オフサイトセンターにおられる武藤さんが、もう海水も考えなくてはならないんじゃないのみたいな、これは官邸と御相談ですかみたいなことをおっしゃっておられるようなんですけども、武藤さんも6時以来の経緯というのは御承知なんですかね。

○回答者 と思いますよ。武藤は海水でいいんじゃないかと思っていたようなんですけども、これをだれが決定したか、よくわからなくなっているわけですね。官邸からの電話がすべてあれして。武藤はオフサイトセンターにいますから、官邸の意向はわからないので、官邸と御相談ですがみたいなコメントをしていると思うんですけども、意思決定者がわからないという状況ですね。

○質問者 所長はもともと海水を入れようとしていたわけですね。官邸の方の指示をした後、人が現場にいれば、またそこで総理となるでしょうけれども、その人自体は官邸にいるわけだから、話ができないわけですね。

○回答者 できません。

○質問者 あと、1号機の爆発のころには自衛隊が来られようとしていて、結局、爆発を目撃して、オフサイトセンターに戻ってきた。これはオフサイトセンターに詰めている■さんからさっき話があって、外部被曝を受けてしまって、自衛隊が直接1Fに行くのがなかなか難しいかもしれない。これは要するに、自衛隊に水を運んできてもらうというオペレーションがあって、それがなかなか思うようにいかないというところで、本部の総務班の■さんという方が、本部を通じて、改めて要請していると、窓口はオフサイトセンターを通して行うんで、ちょっと待ってくれということをおっしゃっておられますけれども、自衛隊から運んでもらう水というのも、1つは当て込んでいるわけですね。

○回答者 勿論。

○質問者 実際、3号機が爆発する間際、10時53分でしたか、5tのものが7台ぐらい来られた、あれはまさに真水を持って来られたということなんですね。

○回答者 はい。

○質問者 3号機の前逆洗弁ピットの中に水を順次補給していこうとした矢先の爆発だったということになるわけですね。

○回答者 はい。

○質問者 そうしたら、その次が、今度は10時08分ごろですね。09番ですね。

(録画部分)

「消火班から連絡します。現在の消防車による給水、3号への給水ですけども、7500

／mで、圧力が 0.75MPa です」

「      さん、      さん、ちょっといいですか。3号でばたばたしているの、大変申し訳ないんですけども、2号の準備をしないといけなくて、水の手配と、あと、車というか、ポンプ車の手配としてください」

「それで、海水か、どっち使うか、海水使うのか、淡水使うのかで全然対応が変わってしまうんですよ」

「変わらと思うので、海水を使わざるを得ないようなことなんだから（・・・）「水という観点では海水にした方が、今、調べてもらっていますけれども、今のピットが」

「いや、海水は基本的に使わない。だから今、一生懸命、真水をcollectしている。だから、今、消防庁とか、仙台消防署とか、来てくれるという話がいっぱいあるんですけども、情報あるのは千葉支店の1台しか、今、向かっていないんですよ、実態は。消防車が。ということで、もう1台、間もなく」

「だから、それはね、保有している、それこそあそこの（・・・）の水だとか、中でいろいろやって、多分、これだけ行っているから、今日、明日ぐらいにはざっと来ると思うから、基本的には水で行くと。よっぽど水が足りないときは海水、やむを得ないときはあるけれども、基本的には水で行くと、真水で。そういうことでやりたいと思います」

「わかりました」

「ちょっとよろしいですか。2号のパラメータが少しずつ復旧されてきて、見えるような状況になってきたんですよ。それで、炉圧、水位はまだ1個しか見えていなくて、（・・・）ぐらいまでであるように見えるんですけども、炉圧がずっと下がり加減で来ているのと、RCICが長い間回り過ぎていることで、3本トランジェットみたいな状況に行く可能性があって」

「だから、早目に次の注水手段を、ちゃんと紙に書いて、どこまで行っているか、いつ復旧もとか、だれが何をやっているか、どこが課題があるかというのをちゃんと書いて、1つずつ課題を解決してみんなで共有してやりましょうと言っていた」

「それで、水の話をしました。真水で行くんだったら、多分、いろいろと手配しないといけないと思うので、お願いします」

「基本的に、もう小一時間になるんですけども、千葉支店の消防車を2号にあてがい、スタンバイさせようかなと考えています」

○質問者　とりあえず、この辺りで。この辺は10時08分ごろで、東電の公表している時系列表との関係でいくと、3号機は13日の10時30分で海水注入を視野に入れて動くとの発電所長指示があって、それよりもちょっと前のころの話になっていて、もう注水を、真水をずっと3号機は入れ始めていて、ベントなども9時20分のところでやって、恐らくこのときはベントが効いている可能性が、その後のパラを見ると圧力も下がっていつているので、あるのかなという感じの状況があって、この辺で      さんが提起しているのは、

2号の準備をもうそろそろしないといけないのではないかということで、3号は淡水で行ったけれども、これはどうするんですかというような話で、淡水なのか、海水なのかで、海水だったら目の前にあるけれども、淡水だとどうしても、3号もやって、2号もやっていると、すぐになくなってしまいうんで、手配をあらかじめしないと間に合わないんじゃないかという問題意識が出ていますね。このときに所長がおっしゃっておられるのが「海水は基本的に使わない」という言葉であるとか、あと、基本的には水で行くと。よほど水が足りないときは、やむを得ず海水もあるけれども、基本的には水で行く、真水で、そういうことでやりたいと思いますということで、まず優先的には真水ということになっているんですが、そういう発言に至った理由なんですけれども、そこは何が一番。

○回答者 やはり官邸です。

○質問者 それがやはり一番ですか。

○回答者 一番です。当初言っていたように、私は海水もやむを得ずというのが腹にずっとありますから、最初から海水だろうと、当初言っていたと思います。その後に官邸から電話があつて、何とかしろという話があつたんで、頑張れるだけ水を手配しながらやりましょうと。ただ、水の手配はうちだけではできないんで、自衛隊も含めてお願いしますよという形で動いているというのがこの時点なんです。ある程度自衛隊が動いてくれば水の補給は可能であるかなというところ、まだ期待があつた時点なんで、海水に切り替えるというか、そこまでは思っていないというところ、非常に微妙なところだと思います。

○質問者 ■■■さんの発言を見ると、■■■さんに関しては、水という観念では海水にした方がなどということ言われて、要するに、消防庁とか、仙台消防署とか、来てくれるという話はいっぱいあるんだけど、結局、今、情報があるのは千葉支店の1台で、現実には動いているのはそれしかないではないかというようなところから、これで2号だ、3号だ、両方面倒見られるわけがないということで、海水という発言になったんでしょうけれども、今度来る千葉支店の消防署の車は、2号の方の水源にとりあえずはしてというようなことで、このときはおっしゃっているわけですね。所長の腹としては、それでもう何もないということになれば、海水もやむなしということになっているんですか。

○回答者 はい。

○質問者 例えば、この辺り、1号機のときに海水を止めろという話があつたではないですか。

○回答者 連続注入。

○質問者 19時4分ころですね。ああいう感じで、真水を入れていますよと言いながら海水をぼんぼん入れるという考えというのは。

○回答者 多分、皆さん、そういう視線があると思うんですけれども、このときはまだ真水をメーキャップすれば何とかなるタイミングだと思っていたんです。要するに、連続注入も、結局、メーキャップをするなら何とかなるだろうと、こういうふうなところ。だから、腹では、海水も、本当に全然メーキャップの方法がなければ、だめですと、最初、断

るんです。官邸から何言われてもですね。だけれども、まだ幾つか発電所の中に真水が残っていましたから、（・・・）の水とかですね。その前に議論して、どこに水があるんだということで、技訓プールの中に何百もぐらいの水があったので、これを連続でメーキャップできないことはないなとかですね。その後で、さっき言ったように、外からの水の補給ですね、自衛隊も含めまして、これはずっと前から頼んでいたわけで、それが間に合えば、その真水で何とかできるだろうという、ある意味、見通しと、2つあったんで、そこは官邸のところも、多分、私は申し上げたと思う。水はこれだけしかないという中でメーキャップしていくしかない。内容は覚えていないんですけども、これから先、真水が供給できるなら真水もあるよという話を多分したんだと思うんです。そのときに、中で調達できる水はさっき言ったように技訓プールの水しかないし、外からは自衛隊が水をメーキャップしてくれるというような話があるので、何とか行けるんじゃないかと、こう思っていたんです。

ですから、前の日の時点では、1号としてはメーキャップもできない状態で、真水を使えないんで、海水でやりますと、これも腹決めて、海水を注入し始めた。それはもう魔灯も何も関係なくて、魔灯だと。水を注入していると。これをやめるといのはおかしいでしょうと。やっと始まったのに、もっとひどい状態になる。

それから、もう一つ言うと、いつまでやめるのかという指示がないわけです。注水停止しろと言っても、何時間停止するか、この時点でわからないのに、注水しない状態でずっと放っておくのは非常に怖い。ですから、当然、うるさいと。頭ながら無視ということで、中断しないで続けた。ここはまだ水が、メーキャップができる可能性があるんで、何とか中断しないでできる範囲は真水を集めてやろうではないかという考え方ですから、そこはそんなに、海水をどんどんやるという、前の日の状況とは違う。

○質問者 要するに、これをわかりやすく言うと、メーキャップするには消防車が必要、来るわけですね。あのときに使えていた消防車の数よりも増えてきますね。3月13日になれば、柏崎とかからも応援の車が来て、そうすると、メーキャップするときに、例えば、1号機のとこというのは、本当に限られたところで、消防車1台でやったり、非常に限られていた戦力でやっていた。例えば、2号機とか3号機のリアクタービルの防火水槽とかから連続注水で持ってこようとしても、そこまでできるかという問題も出てきますね。それが3号機になってくると、ラインナップに必要な資機材なども増えてきて、それを可能な限りつくっていけば、何とかいろんなところから残っているものをかき集めてくれば、ある程度はできるんじゃないかと。ただ、その代わり、自衛消防隊とか、南明興産の人たちの作業というのは、高線量の中で、そういう作業を強いられるという過酷な状況は出ますけれども、一応、そういうライン構成などはやろうと思えばできると。そうしたら、官邸の方からも、真水を使えるんだったら、そっちをまず極力使えということだったんで、基本的にはそれで、できる限りは粘っていこうという、そういうころの考え方だったんですね。

○回答者　そうです。

○質問者　では、その次、これは 10 時半ぐらいですね。

(録画部分)

「1 F さん、聞こえますか。本店、[REDACTED] です。1 F さん、聞こえますか」

「はい、聞こえます」

「吉田君のところにも電話行っているかどうかあれですけども、ちょっと状況認識をしたいと思います。武黒さん、あるいは官邸との話です。まず、1 F さんについては、海水を入れるということも当然視野に入れて動くべしという認識をしていて、もう海水も入っているというようなことも思っていたけれども、とりあえず淡水が入ることは悪い話ではなくて、それで、もう海水を入れるべしという判断で下りているというのがまず 1 点。

それから、武黒さんから至急状況を知りたいというのは、DD 系で入れている水の量と、今ある量というかな、それから、設備系でしたか、ろ過水を入れているんだっけね。それが何 t ぐらいあって」

「DD が、今のところ、40 t × 2 ということで 80 t あります」

「80 t。どのぐらいもちそうですか。おおよそ」

「大体、800ℓ / m、0.8 t / m ですから、80 t ですから、何だ、わからなくなった」

「だれかに整理してもらって、私に、[REDACTED]」

「それと、オーダーだけ言っておきますと、要するに、今の化学消防車の方は、40 t の防火水槽が 2 つバックアップで入っていて、80 t だと。それから、DD の消火ポンプの方は、これはろ過水が水源なんで、一応、800 t、今あると言っています」

「ろ過水が 800 t」

「DD のポンプの方は、消防車よりも突出圧が低いですから、まずは化学消防車等が働いているという状況です。それで、流量は 800ℓ / m ですから、今の 800 t の方から言うと、800 ÷ 0.8 ですから、100 ミニッツ近くぐらいの感じなのかな、大体。それで、今、水源を探しに行っていると、こういう状況です」

「それは技訓のところの水なども入れれば、まだ 800 t ぐらいはありそうだと、そんなところでしょかね」

「はい」

「今、海水の方についての注入準備というのは」

「ステップで、続けています」

「ステップで、吊るのを、横断的にはどのくらいで」

「ものの 2 時間ぐらいで、化学消防車が吊っているところの、防火水槽から吊っているホースをそのまま (・・・) つけてやればできるということで、10 分もあればできる」

「では、いつでもできる状況。淡水も今、入れているのはやってください。では、そういうことで、武黒さんには返しますが、いずれにしても」



「吉田さん、済みません、今、計算したけれども、2時間ではなくて、20時間ですよ。今の水源が枯れるのは」

「違う違う、それはろ過水込み込みで言っているでしょう」

「そうです」

「私が言ったのは化学消防車の方だけで言っている」

「わかりました」

「化学消防車だから、そっちを専念してやっているんですよ」

「わかりました」

「化学消防車、もう一回確認します。40 t × 2 というのが、今、入れる 80 t。それから、持ってくれば、40 t、貯槽が 2 あると」

「そういうことです。どんどんここに入れる」

「それはバックアップ。それから、ろ過水が 800 t あるので、ろ過水側は加圧（・・・）は低いけれども、頑張れば 20 時間ぐらいはもつかもしいない」

「そういうことです」

「ただし、海水の方が、手早くやれば、10 分でも 15 分でも、ホースを海につなげれば、化学消防車の方から入れられますよと」

「そういうことです」

「そういう認識です。では、伝えます。割り込んで済みません。以上です」

○質問者 ここで止まって。今、小森さんから、テレビ会議を通じていろいろと質問みたいな形で入ってきているんですけども、まず、最初に出だしのところで、状況認識をしたいと思うということで、武黒さん、官邸との話ですとあって、「1F さんについては海水を入れるということも当然視野に入れて動くべしという認識をしていて、もう海水も入っているというようなことも思っていたけれども」という、この「思っていた」というのは、そのときの話をしているところでは、小森さんがそういうふうに思っていたということ。趣旨としては。

○回答者 わからないですね、これ。

○質問者 仮にこれ、武黒さんが思っていたんだったら、もともと指示したのはあなたでしよう、そっち側でしようという話ですね。特に、その後に官邸との間で電話をとっているのはなかったですか。

○回答者 なかったですね。

○質問者 いずれは官邸も視野に入れて動かざるを得ないですよということを、その後の、例えば、9 時半とか 10 時ぐらいに所長の方から御連絡を武黒さんの方に入れるなりというような記憶も特にないですか。

○回答者 ないですね。この辺、全く欠落しているんですね。

○質問者 ここで一応、言っているところを見ると、小森さんが官邸の武黒さんにいろいろ

ろ情報などを連絡入れていたんですか。

○回答者 だから、これ、2段やっているんですね。本店の本部と官邸の連絡ラインが勿論あって、これは本来のラインなわけですね。連絡をすれば。そこに何かわけわからず、現場との連絡ラインができてしまっているから、私に指示が来るんですけども、本来は本店本部なりを通して、保安院を通してくるべき話が、こう来てしまっているから、こう来たり、こう来たりするわけです。だから、どういう状況で、時間が変わりますから、多分、官邸の中でもいろいろ議論をやっているんだと思うんですけども、こっちから見ると全然わからないんです。

○質問者 官邸から下りてくるときは、本店ルートと直ルートがあって、こういう場合はこことかいうことでもないんですか。

○回答者 ないんです。さっきの海水注入から淡水入れろという話も、本来、私に電話してくるというよりは、本店にどうなんだという話をして、こちらからこんな状況ですという話にすればいいんですけども、こっちに来てしまっていますから、結構重く受け止めて、今、全く真水がゼロというわけではないから、できる範囲でやりましょうと、こういう形で言っているんです。それを逆に本店に伝えて、官邸から今、真水優先という話があったんで、それで動くよということを本店に伝えているという状況なんですね。

○質問者 この3号の注水関係については、もうすべて現場と官邸で直でやっているというわけでもなくて、最初の入口のところはそうなっていたけれども、その後は本店が報告をしてみたいな話になっているんですね。自分たちは状況がわからないから、いろいろ聞いてやる。ただ、本来は、本店を通じてやるというのが正規の予定していたやり方であってですね。

○回答者 そうです。あり得ないですよ。官邸と現場がつながるということ自体が本来あり得ないですよ。

○質問者 官邸も、緊急参集チームからというんだったらまだわかるんですけども、現場対応が必要だということですね。

では、その次、10時43分。

(録画部分)

「ちょっと確認します」

「はい」

「ちょっと、いいですか、1Fさん。今、保安院から指示が来まして、保安院としては、PCベントの1時間前から周辺線量が上がっているんで、ベント前からECVから漏れていると思っている。ということは、1F-1のようなこと、爆発などが起こる可能性があると思っているので、例えば、ブローアウトパネルを開けるなどのような対策を考えると、こういう指示が来ています」

「はい」

「それ、検討願います。うちでもちょっと考えるけれども」

「逆に言うと、そこはさっきも言ったように、みんなで考えましょうという話ね」

「本店の■■■■君が一応、評価してくれて、■■■■君にお話するようにさっき言いました。それは解析上の話なので、ハード的な対応については、もっと一緒に考えないとだめだと思っています」

「はい」

「どうしたの、お話はできたの。吉田君ね、■■■■君がお話する相手と、ちょっと紹介してもらって、それから、電話がつながらないんだ、■■■■さんには。どなたに電話したらよろしいですかね」

「逆に■■■■君に決めてもらいますので、■■■■君から■■■■君に連絡します」

「OK」

○質問者 これで。この辺りは、保安院からの指示として、ブローアウトパネルを開けるなどの対策を考えるということも、3号機については線量などが上がっているんで、また同様の事象が発生するんじゃないかということを懸念していると。恐らく、そういう懸念は現場の方でもずっとお持ちでしたね。ブローアウトパネルを開けるなどの対策を考えるという指示があって、それを検討しましょうみたいなことがあって、これを見ると、本店と現場の方で、直接■■■■さんから、どなたか人を決めて、■■■■さんと窓口になっていろいろお話をしていきましょうみたいな形になっているみたいなんですけれども、この時点でだれか具体的な、ブローアウトパネルをどうしようとかいう話はされていたんですかね。

○回答者 していました。結局、この前も両先生いらっしゃったときにその辺の話をしましたけれども、1号が爆発したときから水素爆発の可能性は否定できないんで、水素たまっていると、逃がさないといけない。ブローアウトパネルを開けないといけない。けれども、ブローアウトパネルは中越沖地震の絡みでちょっと硬くしているんです。要するに、余り開かないようにしている。地震でがたっと落ちてしまっ、開いてしまったものですから、逆にブローアウトパネルを開きづらい方向に改造していたんです。それが仇になって、要するに、人力でなかなか開かないような状態なんです。これは建築の話になるんで、物理的に本店の建設部と一緒にあって検討してくれという話をしていました。けれども、それはなかなか実効的な方法はないんで、最後は外からはしご車を持ってきて切るだとか、それにしたって準備にえらい時間がかかるなというような話をしている中で、こういう状況になっていくんで、高橋からさっき電話があったようなことを言われても、どうしようもないわけですよ。だったら、「保安院来てやれ、ばかやろう」と言いたくなるわけですよ、はっきり言えばですね。こんな腐った指示ばかりしやがってと、いまだにこのときのことはむかむか来ますけれどもね。こんなのばかりですよ。ただ単に口で何々しろみたいな。ばか言えと。

○質問者 ラブチャーディスク破けとか。

○回答者 破けとか。見るだけでも、保安院と出てくると、むかむかすることしか言っていないわけです、はっきり言ってですね。

○質問者 保安院からの指示として、本店の方から話が来ているんですけれども、保安院からの指示に関して言うと、本店を通じてというラインだけだったんですか。

○回答者 そうですね。

○質問者 直というのではなくて。

○回答者 ないですね。

○質問者 保安院の出先というか、保安院の事務所が。

○回答者 このころはもういません。1人もいないです。

○質問者 このぐらいの間は、そういうのはないですか。

○回答者 ないです。彼らは、この状況を報告したかもしれませんが、こちらに対する指示だとか、そういうのは全くないです。

○質問者 今のブローアウトパネルの話なんですけれども、中越沖地震の後に、容易にパネルが外れないように、地震対策みたいなもので、なかなか開かないようにしたという話ですね。その前などは、手動で開くような。

○回答者 そんなに軽いものではないんですが、強化後よりは、もうちょっと何とか、器具を使って開けられるような状況だったんですよ。どれぐらい硬くなっているか、実際、確かめていないんですけれども、改造した側の建築から言うと、なかなか開きませんという話を聞いたんで、何でそうなったんだと言ったら、中越沖地震でしっかりとつくってしまったみたいな話をしていました。それを開けられるような方策を本店と一緒に検討してくれという話はしておったんです。

○質問者 例えば、手動でぐーっとやったら緩んでぽんと開くとか、そういう感じではないんですね。

○回答者 ないんですよ。

○質問者 では、開けるとすると、周りを緩めたり、やらなければならないんですね。

○回答者 はい。2つあって、保安院が言っている話は、1つは、ブローアウトパネルを開けるという議論と、■■■■と■■■■にいろいろ言っていますけれども、■■■■がやっているのは開けるという議論ではなくて、水素リークがどれぐらいの量になるかと。恐らく可燃限界とのバランスで、どうなるかということを、本店の■■■■はそこを確認しているんです。その内容を現場でだれかがフォローしろということで■■■■に、■■■■がどんな検討をしているのか聞いておけという話をしている。ブローアウトパネルを開ける話とはちょっと違う。

○質問者 違うんですね。水素とかのリークはどのくらいとか。

○回答者 発生量がどれぐらいで、リークがどれぐらい。

○質問者 どれぐらい建屋の方へたまるかとかですね。その辺は技術班ですか、やるとしたら。

○回答者 技術班です。

○質問者 それが本店と連絡を取りながら、情報を得ながらと。

○回答者 ここは多分、かなり特殊な話なんで、本店の■■■がやっているんですけども、うちのサイトの技術班はフォローし切れなかったんで、特別に■■■にフォローしろとユニット所長に指示しているというのがこの時期です。

○質問者 その後、例えば、本店の方から、リークがどういうふうになっているか、いつごろぐらいに危ないですよみたいなのが、打ち返しみたいな、何かこう。

○回答者 これは記憶にないです。

○質問者 その前に爆発してしまったから。

○回答者 まだ1日ありますね。これは13日だから、まだ1日あるんで、この間にいろいろやりとりをやっているんで、そこはまだ余裕がある。

○質問者 余裕があるんですね。

○回答者 ですから、開ける話も、硬いよねという話で、検討せいという指示をした後で、フォローアップはまだできていない状況です。この夜辺りに、ああだこうだ、あれやる、これやるという議論をしたところですよ。

○質問者 それから、しばらく、■■■さんと■■■さんとか、指示を受けた人間が連絡を本店とやりながらしているということなんですね。

○回答者 はい。

○質問者 次は、20 ですかね。

(録画部分)

「(・・・) ルートでそうしています」

「昼間大変心配した1F-2への海水の供給なんですけど、これはどのぐらいに始められるような予定になっていますか。見込み」

「30分か40分で注入するようにします」

「いえ、ちょっと待って。2号機については早目にやりたいんですけども、今のところ、データは安定しているということが1点、それから、3号機、1号機への供給を元に戻すということを一義的にやりますので、そこはしっかりやると。条件をしっかりとった上で判断したいと思って、また時間については改めて御説明します」

「ということは、昨日の段階で2号のデータを見て心配したんですけども、とりあえず今、出ているデータを信じられる状況にあるというふうに判断されると」

「午前中は炉水計しかなかったんですけども、今、炉圧、ドライウェル圧力等々、もうちょっと細かいデータ、そのトレンドを見ている限り、2つの水位計で一応、同じような値を、午前中は1つだったんですけども、そういうところを考えると、若干余裕があると思っています」

「はい、わかりました」

「その辺を総合的に、発電所として判断させていただきたいと思います」

「3号、4号を優先的に続けるということですね」

「はい」

「了解」

「その件で、本店から（・・・）ですけれども、2号の水がないということは認識しつつも、海水からいきなりやるように聞こえてきていて」

「海水からやりますよ。そこは考え方が混乱しているみたいなんだけれども、要するに、もともと1号機はお水がどこにもないんで海水でやりました。3号機はかなり真水があったんで、真水から始めましたが、結局、水の量が足りなくて海水に切り替えたというのが3号機。2号機も本当は真水でやりたくて手配をしたんですが、今日の昼の段階で、場合によっては急遽始める必要があるということを考えて、海水での供給で考えた。そのときに、3号機大丈夫かとか、3号機が危なくなってきたんで、2号機よりも3号機にウェイトを置いて見てきているというのが今の状況で、その間に、2号機用の真水の用意はしていませんでしたから、その後は海水でやるということで進めている、こういうことです」

「わかりました。こちら側の勝手な考えだと、いきなり海水というのは、そのまま材料も腐ってしまったりしてもったいないので、なるべく粘って真水を待つという選択肢はあるというふうに理解していいでしょうか」

「理解していけなくて、もうあそこのラインナップをして、供給源を海の供給源にしてしまいましたから、今から真水というのはいないです。時間たっています、また」

「昼間そういう方向で決めたんだけれども、■■■■君が今、改めて質問している趣旨を説明してもらった方がいいと思うんだけど」

「■■■■君が言いたいのは、真水でやっておいた方が、要するに、塩にやられないから後で使えるということでしょう」

「そういうことです」

「私もずっとそれを考えたんだけど、今みたいに供給量が圧倒的に大量に必要なときに、やはり真水にこだわっていると大変なんですよ。だから、この状況で行けば、海水に行かざるを得ないと考えているんです。こういうことです」

「現場の（・・・）理解をしました」

「それでは、供給の話はよくて、次へ行っているのかな」

○質問者 ここまで、とりあえず。今のところは、3月13日の20時20分とか、そのぐらい以降、夜の話なんですね。このころは、3号機についてやるのと、あと、2号機に関して、時系列表の20ページに、12時05分に海水を使用する準備を進めるよう発電所長指示とあるんですね。これは3月13日の12時05分です。

○回答者 20ページ。

○質問者 これですね。13日。



○質問者 では、この次。

(休憩)

○池田さんから直。

○回答者 そこもまた記憶ないんですけれども、ベントする、しないで、現場でばたばたしているときに、菅総理が来るという話があって、しょうがないなと思って、準備してくれみたいな話はしていたんですね。そのときに、ベントとの絡みで、そんな話があったのは、どうも記憶から欠落しています。どっちにしても、現場で努力しても、なかなかできていないんで、菅首相が来るから、それで遅らせてくれと言ったって、現場がもともと全然バルブが開かないという状態ですから、チャレンジしている状態ですから、まだしばらく難しいと思っていたんで、余り記憶に残っていないんです。

○質問者 例えば、武藤さんから、池田副大臣がこんなことを言っているんだけど、ベントの時間をいつごろにするんだとか、そういう。

○回答者 あったかもしれません。

○質問者 だけれども、記憶にはない。

○回答者 ほとんど残っていない。

○質問者 そうすると、所長がおっしゃるように、自分の時期についての判断にさしたる影響がないから記憶から欠落しているんだと。

○回答者 はい。とてもではないけれども、菅さんが来るという時間にできるとは思っていなかった。

○質問者 経産大臣が、海江田大臣が、実施命令を6時台に出しているんで、向こうからすると、もうすぐにでもするのではないかと。現場の状況を知らないですからね。そうすると、ちょうど菅さんが来られるのとかぶってくる可能性があるんで、そうすると、副大臣としては、その辺の調整をしなければいけないのではないかというので、ベントの時期を若干遅らせるなり何なりという発言になるわけですね。

○回答者 はい。

○質問者 ただ、そのころ、とてもそういう状況にないので、特に影響はないと。

○回答者 記憶にも残っていない。

○質問者 わかりました。

そうしたら、■■■■さんが終わって、次が26ですね。これは、日が変わって3月14日の未明ごろですね。1時台ぐらいですね。このころというと、例えば、2時20分ぐらいに正門付近で線量が上がっていて、15条通報されている時期のちょっと前ぐらいですね。では、お願いします。

(録画部分)

「1Fさん、聞こえますか」

「はい、聞こえます」



「至急の話なんですけれども、今までからずっと言われていることなんですが、保安院からまた督促が来て、1F-2の消火系への切り替え時期のことです。それで、保安院の立場は、確かに今、RCICは動いているものの、3号のようにHPCIもずっと動いていて、急に止まってしまって、その後、結局、相当燃料損傷を起こす羽目になってしまったということから考えると、今、RCICはとりあえず置いて、しっかり水位が確保されているうちに、消防ポンプへの切り替えをやらない理由が全くわからないという、そういうことです。要は、早く意思決定をしてやるべきではないかと、こう言われています。それについて、ここで早く決めたいと思っています。これについて、サイトの見解はどうでしょうか。今、本店とは、SR弁の健全性と、それから、FPの方のラインナップ、それから、例えば、（・・・）けれども、確実に動くということを確認できるのであれば、保安院が言っている方がメリットが多いと思っているので、その前提条件を含めて、サイトの見解をお聞きして、ここで意思決定、（・・・）と思っています。趣旨は今、言ったような話です」

「昨夜にも説明したとおりで、2号への消火系の切り替えについては準備が整っています。ただし、今、海水のピットが空になってしまっていて、そういうことで、1と3への消火系の注入も一旦停止して、現場の対応をやっています。現場の対応というのは、海水のピットをまた満たす、そろそろ今、やっているところで、海水系の注入が1も3も止まっている状態です。ただし、海水ピットがまた満たされれば、1も3も同じように継続、復活して、かつ2号も準備が整うということになります。ただし、2号については、これも昨夜言ったように、PCVのベントラインへのコンプレッサーの追加、要するに、強烈なエンジン付きのコンプレッサーを事前に追加しておくというのがまだできていない」

「済みません、これは、今、2Fの方から到着しまして、これを受け入れて、これから現場へ持ち込んで、つなぎ込みたいと思っています」

「そうすると、消火系への切り替えに関連して、今、主要なパラメータのうちの原子炉圧力が見えていないんですよ。これも今、見えるように、バッテリーをつなぎ込んでいますので、このパラメータが見えるようになれば、その条件が整うので、海水系への投入ができるようになると、そういう状態になっています」

「基本的には、保安院の言うように、その方向を目指しますけれども、その条件がまだ整っていないので、その条件が整う努力を一生懸命続けていて、それが整い次第やりますと、そういうことでいいね」

「そういうことです」

「では、そういうふうに回答するということによろしいですか。小森さん、いいですかね」

「では、コンプレッサー」

○質問者　では、ここまでで、とりあえず。ここは、まず保安院の方からの話があって、2号機のRCICが動いている間に、早いうちに消防ポンプを使って海から水を入れた方がいいんじゃないかということで、本店も、条件整うんだったら、それでいいんじゃないか

ということで、そのとき、サイト側の見解はどうですかということで、吉田所長と書いていますけれども、これは■■■■さんで、もう一人言っていたのはだれだったんですか。

○回答者 あれは■■■■です。1 Fで説明したのは■■■■です。

○質問者 では、その辺りでおっしゃっておられるところで、特に■■■■さんがおっしゃっていることですが、当時、3月14日の1時10分～3時20分までの間、これは3号機の方に書いてあると思うんですが、時系列表で言うと31ページ、3号機前の逆洗弁ピット内の水が少なくなって、水が取れない、そこに補給が必要だみたいなことになって、その後、3時20分に消防車で海水注入を再開と書いて、この間、水が入ってなくて、ちょうどそのときの話になっているんですね。

3時20分、これは東電でイラストでずっと、消防車による注水の概略図案と、これは関係者からいろいろ聞いていったところを最大公約数的にまとめたもので、一部間違いが判明しているんですが、この辺りは正しいので、11ページ辺りを見ると、逆洗弁ピット枯渇と書いてあって、1時10分から。このときの状況というのは、1号機にも2号機にも、それから、3号機にも、それぞれ消防車を1台ないしは複数台使って、それぞれタービン建屋の送水口から、この逆洗弁ピット内にたまっている海水を入れるということの準備をしたり、あるいは実際に1号と3号は入れて、2号はその退避という状況で、この2号からも入れた方がいいんじゃないかという話が1時10分以降にあって、ただ、1号と3号というところ自体も、ここは水取れなくなって、止まっている状況ですと。ここに水を入れましょうというところで、実際に、その後、3時20分から、まず3号機について注水を再開したんですが、これは水を入れるというよりも、対症療法的というのか、水が枯渇と書いてありますけれども、完全になくなったわけではないですね。

○回答者 なくなったわけではないですね。

○質問者 水がたまっている部分があって、位置を動かしたら取ることが可能になったんで、とりあえず3号機にはこれで水を入れましたということで、実際には、その後、作業内容としては、未明から明け方にかけて、どんどん消防車が届いてきて、消防車をつないで、物揚場から逆洗弁ピットに水を入れるということをやった上でということになっていて、この3月14日の未明ころなんですけれども、このころというのは、優先順位としては、3号機が一番まずいという状態になっているんですかね。状況から考えると、2号機は一応、RCICが起動中という状況で、1号機は海水を入れていたんですが、1号機もこの時点では逆洗弁ピットから水を取れなくなると、水は入らない状況なんですけれども、そうすると、1号機も水がないという状態ですが、1号と3号で、3号の方がというのはどういう？

○回答者 1号機の方は、その前から注水していますから、リーク、どれぐらいしているかという話がありますけれども、水がたまっているとすると、注入量は1号機が圧倒的に、3号機に比べて、それまでの注入時間が考えて長いわけですから、ある程度水がたまっているだろうと。だから、その水による除熱が効くだろうと。3号機は注入してからそんな

に時間がたっていませんから、これはやはりある水を入れておかないといけないという意味での3号機と1号機の順番。いずれにしても、両方とも必要なんですけども、あえて言うと、今までの注水量から考えたときに、3号機の方が状況としては厳しいでしょうと、こういうことです。

○質問者 では、復旧の作業手順としては、まず3号機からということになるわけですね。

○回答者 はい。

○質問者 結局、ここで言われているところの海水ピットがまた満たされれば、1号も3号も同じように継続が復活してということ言われていて、水源として拾えるところがないかというのはずっと当初から、海水は向こうにはいっぱいあるけれども、逆洗弁ピットは有限ですから、どこかないかみたいなことは現場の方でされていたようで、結局、消防車が届いたということで、では、吊るものあるからという方向になっていくわけですね。この辺の具体的な、消防車何台並べてというところまでの情報は来ないんですかね。

○回答者 来ていますよ。

○質問者 それも来ているんですか。

○回答者 本部で共有していますから、消防隊が今、来たんで、こうラインナップします、行けというような話はしていますから。

○質問者 物揚場から汲み取って、それを逆洗弁ピットの中に入れますというような報告も来るのは来る。

○回答者 勿論、来ます。

○質問者 報告とともに、例えば、円卓の方で、あそこがいいんじゃないか、ここがいいんじゃないかというようなことは。

○回答者 あそこがいいというのは、3号機か1号機かという意味ではなくて。

○質問者 でなくて、例えば、物揚場が。

○回答者 もともと、どこから取れるんだというのは、その前にものすごい検討しているわけですよ。4号機側のこちらから取れないかとか、もっと言うと、4号機のタービンビルの地下に、そのときに2人亡くなっていて、遺体なんですけれども、いたんですが、ここにも水がたまっているんで、要するに、遺体救出も含めて、この水を使えないかとか、いろんなことをその前にやっているんですよ。実は、ここも、タービンビルの大物搬入口の入口をばーんとバックホーで壊して、消防車入れて、水が引けるかどうか、チャレンジしているんです。水は引いたんですけども、水位が低くて十分に取れないんで、引き切れないとか、いろんなことをやっているんです。

○質問者 それはもう実施しているということですね。

○回答者 しているんです。ですから、表に出てきていませんけれども、この4号機のわきに、4円盤まで行かなくても、10円盤から下に水が据える場所があるんで、そこから吸えないかということも考えているんですが、それも場所が瓦れきがあったりして、非常に狭いのと、結局、ホースを垂らしたんですけども、そこから吸えないということも確認

したりとか、現場でそういうことをいろいろやった末で、消防ポンプが来たんで、ここが一番確実だから、ここから行きましょうと、こういうことをその前に消防チームとやって、その情報は全部共有しています。

○質問者 今、御遺体2体の話が出ましたけれども、御遺体を搬出するというんですかね、その作業というのは、どの段階。

○回答者 私は申し訳なくてしょうがなく、最初の日からダイバー入れて探すということを含めてやれということで、実際、柏崎から、そういう作業をしている人がいたということで、来てもらうことになったんですが、線量の話をしてたりで実現できなくて、この作業をやっている最中にずっと私の頭にありました。早目に4号機の水を抜いて、遺体捜索に行くというのも、原子炉の維持と同時にやらないといけないとずっと思っていました。だから、さっき言った4号の水を使えればと、ある意味、両方できるかなということを含めて、チャレンジまでしたんですけれども、無理だった。

○質問者 結局、いつごろになるんですか。

○回答者 2週間、3週間たったぐらいかな。結局、原子炉はある程度安定して、4号機の水を吐き出すという操作にかかれて、水位が下がってきてですから、どこか記録あると思うんですけれども、2週間ぐらいたってからだったかな。4月になってからかな。ぎりぎり、そんなころだと思います。

○質問者 それは4号機の水を全部吐き出して。

○回答者 吐き出してということになるんですね。ここは私はよくは覚えていないんですが、私が登場していないではないですか。本店の高橋の話に対して。これは本店高橋なんですけれどもね。ここは多分、何か電話しているんです。だから■■■■が答えているんだと思います。

○質問者 本来だったら所長が。

○回答者 私が答えるべき話を■■■■がやっているわけですね。私はこのときまた官邸から電話を待っていたかどうかですね。このタイミングは覚えていないんですけれども、大体、そういうときは電話を、いずれにしても多分、官邸だと思うんですけれども、固定電話で状況報告したり何か、パラでやっている可能性があると思います。

○質問者 これも14日ですね。

○回答者 未明ですね。

○質問者 細野さんは、ホットラインをつくってからは、毎日のように電話があるんですか。

○回答者 結構ありましたね。どうですかと。

○質問者 本店とかだと、武藤さんなどは直接電話とかはありましたか。

○回答者 武藤さんからですか。武藤は、本店というより、オフサイトセンターにいたんで、オフサイトセンターから電話は何回かありました。

○質問者 それは、武藤さんが、テレビ会議ではなくて、電話でという感じなんですか。

○回答者 はい。

○質問者 では、次、ここまでやって午前中終わります。31番で、3月14日の明け方、夜が明けているところになるんですか。6時とか、そういうところですね。

(録画部分)

「これね、本当に要注意なんだよ。6時から6時20分の間に」

「現状、(・・・)の可能性は低いと」

「50キロになっているでしょう」

「そのとおりです」

「50キロだろう。こんなもの、もう、7時まで(・・・)超えてしまうよ」

「(・・・)につきましては、バランス出ているので、現在、6時から6時20分、対象の地域については(・・・)」

「小森さん、水位がダウンスケールしている？」

「危機的状況ですよ、これ」

「水位がダウンスケールしている？保安院、官邸に、ドライウェル圧力が上がって」

「そう、ドライウェル圧力が急上昇して」

「水位が何。早く連絡して」

「6時10分、ダウンスケールしているんですよ。減ってきていて」

「第1グループは大丈夫です」

「減って、それから、ダウンスケールが6時10分なんで(・・・)」

「少しかぶりますね」

「保安院と官邸につながっ放しにできる、電話」

「かぶる方は20分から止まるということで、予定どおり」

「保安院と官邸の方に同時に(・・・)言っておりますけれども」

「上のベント弁を開けるのを早目に開けなければいけないと思うんですが、バッテリーはつないであるんでしたか」

○質問者 この辺で。このころ、計画停電の関係と、いろいろかぶっているようなんですけども、6時～6時20分の間にですね。

○回答者 3号機の話でしょう。

○質問者 3号機ですね。3号機で、これはドライウェル圧力が50ぐらい上がっているところですね。14日の6時ごろですね。6時が425で、それが470になっている。大体50弱ぐらい上がっていると。それで、水位がこのころ、ずっとTAFマイナスでどんどん下がっていつている時期で、3月14日の6時20分のところは見えなくなっている。両方、AもBもですね。という状況があつて、6時30分のところでは、Aが-100で、Bが-3,500みたいな極端な状況になっている。所長から、危機的状況ですよということを本店に

言っておられて、確かに所長の前のヒアリングのときも、3号機については、1つ、ドライウェルが500みたいなものがずっと続いているのが非常に嫌な状態で、その嫌な状態の根拠は、1号機のときもそういうことから水素爆発などが起こっているんで、直感的にそういうふうに感じているというようなお話だったと思うんですけども、ちょうどそういうところに差ししかかるところの話で、この中で、本店で話していたのは小森さんなわけですね。これは所長がおわかりではないのかもしれないですけども、保安院と官邸に同時連絡するように今、言っておりますけれども、保安院と官邸につなぎっ放しにできる電話ということで言っておられるようですけども、本店と官邸や保安院との連絡がどうなっているのか、当時はわからないですか。

○回答者 全くわかりません。だれがどこにいて、どういう形で本店本部がそこと連絡つけていたか、わかりません。

○質問者 電話でやっていたのか、例えば、テレビ会議システムはその時点ではないですね。

○回答者 ないです。

○質問者 あと、サイト内の状況などを直で見られるテレビ会議システムはその時点ではない。

○回答者 官邸にまで行っていなかったと思いますけれども、そこはわからないんですよ。本店の連絡網は。

○質問者 この辺はよくわかりませんね。いずれにしても、こういう危機的な状況に関しては、小森さんなどにも直接、テレビ会議を通じて、この時点でもう言っているということですね。

○回答者 計画停電の話がうるさかったですけども、ものすごくわあっと、やめろと言っているのに、ぶつぶつかぶせる。

○質問者 計画停電というのは、電源の節約ということなんですか。

○回答者 電気が1F、2F、全部飛んでしまいましたから、2Fはフル運転で、1Fも3つ運転した。それから、広野も飛んでしまいましたし、要するに、電源がない状態で、次の日の電力供給に問題があったんで、計画停電やりますと。最初に2つあって、原子炉の問題がわあわあ騒がれる前に、東京電力の計画停電の話がえらい問題になったと思います。それで、このシステム、同時にそんな話をしているんですね。

○質問者 両方わあとかぶってしまったんですね。

では、とりあえず午前中はこれぐらいで、また午後、引き続きお話を伺っていきます。とりあえず休憩にいたします。1時からお願いします。

(休憩)

○質問者 そうしたら、午後も引き続いてやりますので、お願いします。

午後一発目は、3月14日の夜が明けたぐらい、6時台から7時にかけてぐらいの話で、話の内容としては、3号機のところ辺りですね。ドライウエル圧力が非常に上昇してきたという辺りの話で、前に所長のヒアリングのときに、前回だったと思うんですけども、いきなり嫌な数字が続いて、現場の作業員たちを退避させたというのが、これまで時系列に載っていないということで、その辺の下りなのかなという部分がここにちょっと出てきているので、それを確認していただくということです。

(録画部分)

「吉田さん、聞こえる？吉田さん」

「はい」

「ドライウエルのドライのベントというのは設計圧の2倍ぐらいのところまで頑張ってというのがAM上の手順だと思うんだけど、そういう認識でいいですか」

「800ということですよ」

「そうそう」

「そうなんですけども、それでいいと思いますけれども、ただ、上昇量が急激なものですからね」

「なるほど」

「ここがものすごく気になる。それから、燃料域のあれが、6時20分からダウンスケール、その前が急激に低下してダウンスケールしているということは、かなりドライになっているということなんですね。極端に言うと、仮想事故レベルになっている可能性があるんじゃないか」

「なるほど」

「こうなりますと、今、作業で、プラントの前、かなりの人間がいますし、ここにもこれだけの人間がいるんですが、これをどうするんだと、そっちを考える方が先になるかもわかりません」

「了解。いずれにしても、2倍というぐらいのところではドライウエル側のベントということとはそうなんだけれども、いずれにしても、かなり早い時間に来ることを想定して、まず放出量というか、推定値を出してもらって」

「6時35分でドライウエル圧力520キロです」

「聞こえなかった」

「500ですか。520出たから、ドライウエルは」

「非常に要注意な状況。放出量の評価とか、そういうこと、すぐ出るか。要は、避難をするかどうかというような、避難距離を拡大するかどうかというような話の判断に関わるので、とにかく今、急いで計算してもらえないかな」

「今、計算中、あと5分ください」

「それから、作業員の安全確保の観点から、風向きが、だから、ちょっと大熊側に、もし

外にいる人でも、3号機前はちょっと難しいか」

「武藤さん、武藤さん、この状況で何もできなくなってしまうんですけども、現場の作業員、うちの社員、一回こちらに退避させてよろしいですか」

「了解しました」

「退避命令出します。現場にいる企業の方々、現場から上がって、こちらに避難してください。これは中央操作員もいるんですが、これはどうしましょうか。これも避難した方がいいですね」

「中操の線量を見て判断してください。中操の線量。線量わかる？」

「中操の線量ね。中操の線量どうなっている？確認します」

「みんな、今、オンラインでつながっている。保安院と官邸、つながっているね。切らさないで、今の音声をはばそのまま伝えてもらってもいいです。中操退避したらベントができないんですけども、それを含めてどうするか」

「線量率見てと言っている」

「吉田さん、そこの線量も含めて、線量をよく見てくださいね」

「はい」

「          さん、丁寧に周りの線量を測ってください」

「はい。今の部屋の線量につきましては、マックス  $28 \mu\text{Sv/h}$ 、ここです。モニタリングポストとか、その辺は、周りの線量が、上昇率が非常に広がって、その辺を丁寧に」

「一応、今の緊対の28ということであれば、そこは問題はないということだと思います」

「最新のモニタリングポストのデータで、MP2番近傍、最終6時の辺りで  $400 \mu\text{Sv/h}$  でございます。正門付近、5時の値になりますが、 $6.65 \mu\text{Sv/h}$  です」

「ということは、吉田さん、周りは余り変わっていないということだよ」

○質問者　ここで一回切りますかね。今のところ、3号機のドライウエル圧力が非常に上がっているということ。この途中のところで、武藤さんと所長との間にやりとりがあって、この状況で何もできなくなってしまうんですけども、現場の作業員、うちの社員、一回こちらに退避させてよろしいですかと。了解しました、退避命令を出しましたとあって、その後で現場にいる当社社員、企業の方々、一度現場から上がって、こちらに避難してくださいとおっしゃっているんですけども、この現場にいる当社社員とか、企業の方々、一度現場から上がってこちらに避難してくださいというのは、現場に何かつながる手段があるんですか。

○回答者　一応、その時点で、トランシーバーとか、それで現場の人間とは連絡がつくようになっていますので、そこを駆使して、特に炉注をしている消防車の人間だとか、水のメーキャップをしている人間だとか、かなり限られていますので、そこはそういう形で連絡をしたと。

○質問者　ちょうどベントだとか、注水のところもそうでしょうけれども、そういう作業



をしている人たちは一旦引き上げるということになるんですね。しばらくは退避状況が続くんですか。

○回答者 はい。これは何時でしたか。

○質問者 ちょっと早目で、6時半ぐらいからのやりとりがずっとあって、6時30分から40分ぐらいの話ですね。要は空けているような状況で、それで一回引き上げて、ここで中操の方をどうするか、線量測るといいよという話になっておりますね。いずれにしても現場の人たちは引き上げてきて、その後、退避命令の解除みたいなものが出ることになるんですかね。それは記憶だと、爆発がこの日、11時01分に起こっていますけれども、そこまでの間で言うと、どのぐらいまでという感じですかね。

○回答者 2時間ぐらいではないですか。

○質問者 退避が。それで解除して、そこから作業をさせたら、そういう状況になったということなんですかね。退避命令はこの日1回だけなんですか。

○回答者 この日は1回だけです。

○質問者 繰り返し繰り返しではないんですね。

○回答者 ではないです。これで1回退避させて、格納容器の状況がどうなるか見ましようということで退避させました。

○質問者 一応、500台ぐらいをずっと推移して、そこからどんどん上がっていくようなことではなかったんで、ベントの作業もしなければならぬ、注水作業もしなければならぬという一方での要請もあって、その辺のバランスを考えて、どこかで決断しなければならぬということで、格納容器の圧力の水位を見て判断されて、解除して、作業再開ということだったわけですね。

この辺の退避する、しないという辺りでは、本店側なり、あるいは官邸とか、これを見ると、本店の言葉として、みんなオンラインつながっている、保安院と官邸つながっているね、切らさないで、今の音声をほぼそのまま伝わってもらってよいですけども、中操退避したらベントはできないですけども、それを含めてどうするかみたいなのが、これは多分、電話をそのままつなげた状態にするなりしていると思うんですね。この状況がそのまま官邸なり、保安院なりの方に入っていた可能性があるんですけども、保安院なり官邸の方から直接現場の所長のところなりに何かコンタクトを取ってくることはありましたか。

○回答者 このときはなかったです。

○質問者 特にないですか。

○回答者 なかったと思いますね。

○質問者 そうすると、ざっくりした感じでいくと、6時30分から40分ぐらいの間に退避命令が出て、退避をさせて、大体2時間とか、それぐらいのスパンの間、様子見をして、しばらく格納容器が全然動かないんで、8時半とか9時とか、それぐらいの間にはまた現場の方に戻って再開されていて、そうしたら、11時ぐらいには爆発という状況になるんで

すかね。大体の流れとしてはですね。

○回答者 はい。

○質問者 そうしたら、その続きを。

(録画部分)

「3、4号中操当直長席で3.5ミリです。昨日よりは低い。15です。3、4号中操で、平均して、(・・・)付近で15です」

「15mSv」

「15mSvです」

「それは何時で。今ですか。今のデータですか、それは」

「3.5については現時点の値です。当直長席、3.5mSv/hにつきましては、現時点の時間です」

「6時45分ぐらい」

「これも昨日と変わらないよね」

「変わっていないですね。ちょっと注意深く線量を見て」

「ドライウエルの圧力ですけれども、6時35分、6時40分、6時45分、3ポイントとも変わらずに520キロですね」

「少しここは落ち着いているようなので、現場の作業をどうするかということも含めて、もう一回考えませんか」

「はい。ただ、格納容器のあれはともかくとして、1号のような可能性は十分ありますので、この格納容器圧力ということは、水素の発生、そういう意味で、放射能という、そういう危険作業という意味で言えば、ヤードに人を配するというのは、これは極めて難しいと思うんですけれども」

「最後はドライウエルのベントをする作業というのは、今のこの場所から行くと、どういうことになりますか」

「中操の同じパネルなので、サプレッションチェンバの応援のコネクターを外して、ドライウエル側にくっつけることで瞬時にやることができます」

「OK。今、水は入っていないんですか」

「水は入れていますよ。海水は900ℓ/m入れているんです」

「入れ続けているわけ」

「はい」

「補給の方は大丈夫ですかね」

「補給は、さっき聞いたところ、ぎりぎり3号機だけだったら、今、レベルがあると言っていたので、メーキャップがなくなりましたら、ピットに水を運べなくなったんですね。人が今、退避になると。そこが非常に難しいんですよ」

「そこ、難しいね。勿論、人身安全第一なんだけれども、水を確保するところは工夫がで

きるかどうか考えられませんか」

「今、人海戦術やっているんで」

「炉圧を下げる方法として、MSラインのドレンラインのMO弁、L005、006、電源を仮設を引いて、それらを当てて、復水器に逃がすということは実施できないでしょうか。済みません。ドレンラインのMO弁の番号を110万のを言ってしまいました。番号を間違えました」

「110万まではいいんですけれども、MO弁の電源などは全く生きていませんし、今、ドライウェル近傍とか、原子炉建屋の中は入ることも不可能ですから、そんなのは絶対できません」

「わかりました」

「被曝評価の結果、あらあらですけれども、出ましたので、お願いします。ベント条件は、仮想事故で100%放出しています。したがって、今、(・・・)で25%ですので、それと考えるならば4分の1ぐらいの値を更新すればいいんですけれども、いずれにせよ、ヨウ素が支配的です。これは3時間後のデータですけれども、3時間後で最大ポイントは南南東の風2mで評価をいたしますと、最大ポイントは2.2km先、ちょうど敷地境界辺りで5,700mSvです。これが4分の1と考えると、1,600mSvになります。ヨウ素です。その後、この枠が1,000mSvですので、250mSv圏内がずっと相馬郡の方まで3時間以内に広がっていくという評価になります」

「250mSvが北の方ですね」

「そうです。ただし、データを連続して見ていますけれども、東風が支配的なのか、西風が支配的なのかによって全然状況は変わってくるんですけれども、今のところ掌握できていません。済みません」

「今の状況を刻々と、とりあえず話を続けてください。官邸と」

「今の20kmというのはどこら辺なの」

「これは5kmです。ほぼ5kmです。10km、20km、ぎりぎり20kmの範囲ぐらいです」

「20kmのところはどのぐらいの線量なの」

「20kmのところは、250mSvです」

「250mSv/h」ですか。

「いえ、アワーではなくて、積算線量が250mSvです。ただし、3時間ですので、この後、更に時間が経過すると、線量はもう少し増えてきます」

「オフサイトセンター側では、そういう判断みたいなものはあり得るんですかね。その判定会とか、普通だったら、そういう機能ができているんですかね、そういうのは」

「パワー班より連絡します。今、敷地境界のモニタリングポストが地震以降、使用できませんので、モニタリングカーをモニタリングポスト4番、ちょうど発電所の西側になります。(・・・)をしていた下側、モニタリングポスト2番のところは引き上げさせて、当社のモニタリングカーを移動中です。放出が始まりましたら、モニタリングカー内での線

量を確認しながら、南側方向に移動させます。逆に待機するような形になりますが、移動させるような形で確認をしたいと思います」

「緊対室の線量状況を報告します。この部屋について、エリアモニターとγ線の値は0.014μSvで変化はありません。それから、中性子についても検出をされていません。以上です」

「コモリさん、この状況は、保安院とか、官邸とか、共有していますか」

「保安院と官邸はダイレクトで担当者が、この音声も含めてつながり続けています」

「了解」

○質問者 では、ここで一旦。ここの辺りのやりとりは、その後、退避をされていて、これも武藤さんとのやりとりですかね、ドライウェル圧力が520キロぐらい、一応、それ以上の上昇が、余り大きな変動が見られないという状況の中で、他方で作業も進めなければいけないというところから、どうするかということももう一回考えませんかというような示唆を受けて、所長の方は、これまでもおっしゃられているような、格納容器の圧力ということとともに、心配されている水素を測れというところですね。これは、格納容器が壊れる、壊れないという以前に、リークしたものが充満していくというところになってくると、格納容器圧力からは計り知れない。今もでしょうけれども、どの程度の圧力になれば、どのぐらいの水素の発生が見込めるのかということは、この時点では何も測る手段がないわけですね。それで、1号のときの比較からすると、非常に怖い状況が続いているんだというところもあって、ヤードに人を配するというのは極めて難しいと思うんですというような発言になられているんですね。

○回答者 そうです。

○質問者 これに対しては、武藤さんも、それに反論みたいな感じではなかったわけですね。その後、ずっと線量の測定とか、行っているんですが、今、画面にもちょっと出ていたんですけれども、このころ、ベントでは、ウェットウェルベントということが1つあると思うんですけれども、ドライウェル側のところからベントするような検討みたいのは。

○回答者 それは勿論、しています。

○質問者 それもされているんですか。実際にはそれは、3号機に関してはされていないんですね。

○回答者 ウェットウェルを先行してしまったんですね。それをやっている間に爆発してしまって、何か、圧が下がってしまったんですね。ずっと下がってきたんで、ドライウェルベントをやるタイミングが、逆に言うと、検討はしたんだけれどもという状況だったと思うんですね。

○質問者 1号機はウェットウェルだけをやっていて、2号機はウェットウェルに加えてドライウェルもということの検討も、検討の俎上には上がっていたと。

○回答者 3号機。

○質問者 ああ、3号機ですね。ただ、実際に弁を開けてとかいう、そういう操作までには至っていないということですね。

○回答者 そうということです。ここで基本的に、多分、本店が検討している放射線評価ですけれども、これはドライウェルベントを想定していると思います。

○質問者 のような感じですね。文脈からすると。

○回答者 そうです。ですから、この時点でドライウェルベントをイメージした評価を、本店の■■■■君の方でやっていたという状況だったと思います。

○質問者 なるほど。では、検討にはもう入っていたという最中での3号機の爆発ということになったんですね。

○回答者 そうです。

○質問者 では、次、33。確認なんですけれども、3号機が、作業していたら、退避命令をかけて、それだけ危険な状況にあると。それは当然、保安院も官邸も、本店から電話を通じて、オンラインでも通じて、状況は刻々と耳に入っていてという状況の中で、これからごらんいただくところというのは、保安院とか官邸が、要するに、プレス発表の関係ですね。この時点でプレス発表を止めている、止めていないというところですね。

○回答者 プレス発表。

○質問者 要するに、これをごらんになって、何の場面かというところを思い出していただきたいんですが、3号機の状況に関する情報について、今、プレスを止めているんだというような。

○回答者 そんな話は初耳でございまして、33のところですか。

○質問者 はい。9ページ。そこからの流れ、若干まとまったところであるんで、ちょっとごらんいただいて、どういうあれだったのかというのを思い出せばお聞きしたいんで、お願いします。

(録画部分)

「1 Fさん、聞こえますか。1 Fさん」

「吉田です」

「今、二、三、保安院から官邸に向かって共同して処理していますが、今、プレスを止めているそうです。プレスを今、止めているんです。それで、とにかく補給が開始されるものをじっくり見守るということにしているそうなので、水の（・・・）などの状況について、常に官邸と共有しますから」

「はい。了解」

「聞いていなかった、ごめん、何を官邸と何とかと言ったの」

「今、官邸と保安院が、本来、プレスに流すんだけど、今、止めているそうです」

「何を止めているの」

「プレスへ流すのを」

「何を」

「情報を。今の」

「3号機の状況」

「はい。それで、こっちも状況をとにかく今、見守るということにしているそうなので、その状況を、時々刻々変わっているというのを二、三流すようにという指示です」

「了解」

「済みません、自衛隊から提供いただく給水車は満タンでございます」

「皆さん、これから一番重要なのは、各原子炉のパラメータをしっかりと見るということが一番重要。それから、線量をしっかりと時々刻々、変化を把握するということが重要で、これはまずキープしていきます。それから、今の対応策として一番重要な水ですね。補給水の確保について、どの段階まで来ているかということを報告してください。水チームはややもするとここにいないんで、必ず自分のミッションでいなくなる時は、だれか連絡員を置いて、聞かれたらすぐ答えられるようにしてください。今、聞きます。補給水は、ろ過水のこのラインナップと水張りにどれぐらいの時間、リベントを張るのに、どれぐらいの時間がかかるか、答えてください。だれに聞けばいいの」

○質問者 ここで一旦止めていただいて。ここだけ見るとちょっとまたあれで、これは入っていないんですけれども、36番の6ページを見てみますと、その次の録音と同じで。

○回答者 9時52分から。

○質問者 9時52分からですね。

○回答者 わかりました。

○ 違いますね。ちょっとだけバージョンが違う。

○質問者 バージョン違うんですか。タイトル1、3分の1、清水社長とか、出てくるんですね。NHKの報道のことを言っている。本店の広報班が。

○回答者 清水社長が出てこなければだめなんです。ここだ。違うな。

○質問者 清水社長はその前から出てきます。その後ぐらいです。一番下に本店広報班とありますね。ここに、さっきのプレスを止めているという話なんですけれども、先ほど、保安院の方から、止められていったとお話をしましたと。福島第一3号機の関係で、格納容器圧力異常上昇に関する件ですが、先ほどNHKで、東京電力福島第一3号機の格納容器の圧力が非常に上がって、作業員が一時退避したという報道がなされて、マスコミからの質問が予想されますので、現状としては、スタンスとしてまず固めまして、できるのであればプレスをする。だめでも、このトーンで口頭で回答させてくださいということで調整をさせていただいていますというのがあって、この辺の流れを見ると、保安院とか、官邸の意向なのか、要するに、国側の方が、第一の3号機の格納容器が非常に圧力が上がってきたという、この状況に関して、うがった形になるのかもしれませんが。

○回答者 ちゅうちょしていますね。

○質問者 要するに、もう注水できているという状況にして公表しないと、それをしない段階でしてしまえば、そこでまた混乱というか、いたずらに国民の不安をあおってしまうというようなところが入って、それをそのまますぐには知らせなかったのかとも読めるようなところで、ただ、基本的には本店対応ということになるんですかね、ここは。

○回答者 なります。ここは私はほとんど記憶ないです。広報がどうしても、プレスをするか、しないか、勝手にやってくれと、こっちは、現場は手いっぱいなんだからというポジションですから、しゃべっていることも、ほとんど耳に入っていないと思います。

○質問者 それでちょっと何か、あれっという感じだったんですね。

○回答者 はい。

○質問者 基本的には、ここであるところの本店の広報班などが中心となって、その辺りの報道関係の対応は。

○回答者 やると。それから、さっき[ ]が出てきましたけれども、彼が止められていますんで、止められていますんでと言っていたのは、本店の[ ]をやっている[ ]なんですけれども、彼は官庁連絡班長です。とがそこを止めるという話なのと、広報班の方は、だれが言っているかわかりませんが、広報班長等がプレスをするという話と、官庁との連絡、そこでの話でありますので、どちらでも本店マターの話なので、発電所は知りません、こんなことは勝手にやってくれと、こういうことですね。

○質問者 要するに、国側の都合で、注水を始めたらずぐに知らせてくれ、その状況については刻々と知らせてもらって、恐らく報道のタイミングを図っているんだと思うんですね。それを本店の広報班なりが、[ ]さんかな、連絡する係が向こうに伝えて、タイミングを見計らってと思っていたら、NHKの報道で抜けてしまって、一時退避の事実がですね。それで、これを踏まえた対応をしなければならないという流れになっていっているみたいなんですけれども、この辺はもう、現場としては、本店にお任せの。

○回答者 そうです。外の話はもうお任せで、うちはだから、圧力が上がるというのと、いつ水を補給しに行くかと。退避させた後ですね。そこだけで頭がいっぱいで、広報などは知りませんと、こういうことです。

○質問者 これは3月14日の午前中の話で、今のは途中なんですけれども、省略してしまって、次が36番のところですね。これは注水の優先順位ですね。時期的には、3月14日の10時半前後ぐらいの話ですね。

(録画部分)

「そんなことで、(・・・)も御了解いただければと思います。(・・・)よろしくお願いします」

「吉田君さ、先ほど武黒さんから電話があつて、官邸(・・・)ね。電話中なの」

「官邸(・・・)」

「官邸の決定指示事項というのは、武黒さんからありました。それで、3号の冷却を10

tで継続して、残りを、1号を優先して冷やせという指示がありました」

「わかりました」

「よろしくお願いします」

「■■■■君、■■■■君、今のやつ、（・・・）手順を早く決めて、現場で3号機の冷却を落として、1600 /mに。それで1号機の冷却に入れということなんで、至急検討して、だれだ、■■■■と■■■■か。検討した結果、いつからやるかというのを私に報告ください」

○質問者 ここでちょっと。ここで、■■■■さんから、官邸の決定指示事項ということで、これは連絡などをずっとされていた■■■■になるんですね。

○回答者 違う。■■■■はフェローのタカハシです。

○質問者 別の方ですね。

○回答者 フェローの高橋は、小森がいないときに、小森の代わりに、本部長もオフサイトセンターへ行っていましたでしょう。本部長というのは、武藤ですね。本店で武藤本部長の代わりをやったのが、副本部長の小森です。小森がプレス対応だとか、外へ出たときは、小森の代わりを高橋フェローがやった。さっき言った■■■■というのは、ずっと官庁連絡班で、官庁対応の情報をやりとりしていたのが■■■■です。■■■■いるんで、ややこしいんですが、官邸の武黒から電話があったと言っている人間は高橋フェローです。

○質問者 では、実際、フェローの方の高橋さんと武黒さんが。

○回答者 何か連絡を取り合ったんだと思うんです。

○質問者 これは3号機の冷却を10tで継続してというのは、要するに、10t。

○回答者 パワーですね。

○質問者 パワーで水を入れるふうにして、残りの分は1号優先に冷やせという。

○回答者 まだ、この時点で3号だけにしか入れていない。さっきのあれで言うとはですね。1号も入れろというのがこの指示で、そのときに、今、出ている、入れられる量の中で、3号機の方はまず10tして、残りの部分を1号に入れなさいと。1号の冷却も並行してやりなさいと、いわばそういう指示です。

○質問者 こういう、細かいと言うと語弊がありますがけれども、いろんなパラを見たりした上で、現場の方で、注水の中で、どういう性能でやっていくとか、そういうふうにするような、そういうところについて、官邸から本店を通じて指示があったんですか。

○回答者 これは幾つか途中でもありまして、官邸の中でいろんな解析をしたですとか、保安院とか、私はよくわかりません。そこにいた人に聞いてもらわないとわからないんだけれども、解析屋とか何かがそういう計算をしたり、1号機の注水をやめていると何時間ぐらいで危なくなるかとか、そういうことを確認計算した人があるんだと思うんです。保安院なのか、安全委員会なのか知りません。私は聞いたこともないですから。そういうところの話があって、それが官邸辺りに、官邸のどこに行ったか知りませんけれども、そこから行って、武黒を経由して、こっちに来ていると思うんです。だから、向こうはこっち



は見えないので。

○質問者 いずれにしても、1号を優先して冷やせという、残りの部分はですね。実際、そういう方向で取りかかろうということになっていたんですね。

○回答者 はい。

○質問者 これは爆発の相当前になっているんですけれども、当時の状況としては、消防車が来て、物揚場から消防車を引っ張って直列に並べて、逆洗弁ピットの中で水を補給していくと。逆洗弁ピットの中から、1号と2号と3号に1台ないし3台という消防車を使って、それぞれに入れていくというラインをつけて、3号機爆発時に入れていたのは1号のみで、ほかはまだ待機状態という状況だったわけですね。

○回答者 はい。

○質問者 3号機が爆発する前、ちょうどこのころとか、これよりちょっと前の10時台、要するに、退避命令が解除された後の作業中などは、9時20分に物揚場から補給するラインができ上がって、この時点で、例えば、素人考えで行くと、これで水がじゃぶじゃぶと逆洗弁ピットの中に海水が入っていくわけだから、2号はまだちょっとあれとしても、1号と3号は両方とも入れてしまえばいいのになとも思うんですけれども、この水量では賄えない。

○回答者 このとき、避難のタイミングはいつでしたか。

○質問者 避難が、恐らく3月14日の6時40分とか、そのころに退避命令を出しています。

○回答者 出しますね。解除はいつしたんですか。

○質問者 その解除がはっきりしない。これを見ると。どこかでもう行けという話になって。

○回答者 さっきのところで、行かせますよと言っていましたね。とりあえず水の補給だけは行かせますよという形で、水の補給でこのラインナップを完成したんだと思うんですけれども、記憶が本当にここは途切れてしまっていて、その次の爆発の話があるまでですね。

○質問者 この辺は、1号、2号、3号とあって、2号はまだ、一応、この時点では。

○回答者 2号はまだですね。

○質問者 だから、1号も水を入れなければいけないというのはわかっていますね。

○回答者 わかっています。わかっているんですが、そのとき、結局、ピットの水が少なくなっただけで、メーギャップしに行った。とりあえず3号機がかなり中断していた時間が長いので、3号機に水を入れ続けられないといけない。1号機は若干まだ余裕があるというのは、さっきの話ではないですけれども、今までの注水量がかなりの量入れていますから、そういう意味で余裕があるだろうという判断をしていたとは思いますが。

○質問者 そうすると、その判断の根拠からすれば、1号も時間が、2時間、3時間、4時間、5時間、6時間たっていけば、また再開しなければならないという頭にはなるんで

すね。

○回答者 それは勿論あります。

○質問者 だから、この官邸の決定指示事項ということがあるとないと問わず、いずれまた、2号がまだこういう状況であれば、3号をやって、ある時期からは1号も入れるということは当然頭にあったわけですね。

○回答者 あったと思います。

○質問者 次が、爆発の後、夕方のころですね。

○回答者 42番ですか。

○質問者 42番ですね。今度は、3月14日、爆発して、今度、2号機の方もRCIC止まって、このころはベントをして、2号機のサブチェンの水温だとか圧力が非常に高いということから、ベントラインをきちんとつくって減圧操作をしましょうというような状況になっているところで、今からやるところの前のところに、所長のお言葉で、「済みません、吉田です。サイトの皆さん、聞いてください。もう一度、ちょっと頭を整理します。一応、今、計装の方で、2号機の減圧注水に向けて最後のベントラインを生かすという操作をやってもらっているところで、現時点の目標で言えば、TAFが17時30分という最新の予想が出てきましたので、17時、5時をもってSR弁を操作して減圧し、注水をするという操作に入っていくということを決定しました」と。だから、今、この時点では、ベントラインを生かすという操作を減圧注水に向けてやっているという時期で、何とか、TAFが17時30分なので、その30分前である17時にはSR弁を操作して減圧して、水を入れていこうと、ゼロを切るのを防いで、水をどんどん入れていきたいと思いますというような決定のような形を出して、それで動きますというふうにしていた後のところからなんで、それをちょっとごらんいただけますか。

(録画部分)

「本店の高橋明男さんが1Fの吉田所長と話をしたいと言っていますので(・・・)」

「吉田さん、今、電話に出ています」

「今、官邸から、(・・・)か何かで、2号を起動しろ、注入を開始しろというのは行っているはずなんですよ。それを言おうと思ったんで、武黒さんを通じて、今、その話が行っているのではないかと思います」

「はい、わかりました」

「高橋さん、今、所長はその電話中です」

「済みません、本店に確認したんですけれども、先ほど2Fで消防車を受け取って1Fへ持っていけと言われたんですが、来たのは消防士4人であって、消防車が来ていません。このまま行っていいんでしょうね」

「そのまま行ってください。消防自動車を打つんでした。申し訳ありません」

「消防士を連れていけばいいんですね」

「そのとおりです。エスティマに乗ってきた消防士を連れて行ってください」

「わかりました。（・・・）連れていきます」

「ありがとうございます」

「増田所長」

「はい、増田です」

「皆さん、聞いて。本店の方も聞いてください。今、安全委員長の斑目先生から電話が来て、格納容器のベントラインを生かすよりも注水を先にすべきではないかと。要するに、減圧すると水は入っていくんだから、そこは待たないで、一刻も早く水を入れるべきだというサジェスチョンが安全委員長から来たんですが、そのサジェスチョンに対して、安全班、それでいいかしら、こういう中で」

「サプレッションチェンバの水温が130度を超えてきて、蒸気がサプレッションチェンバに落ちてでも恐らく凝縮しないということは減圧が見込めない。そうすると、（・・・）水がそれだけ（・・・）出てきて、多分、減圧できないということを恐れているというのが実態です」

「サプレッションチェンバは水温がもう100度を超えているんですよ」

「その話は斑目先生（・・・）」

「済みません。本店、          です。吉田所長」

「官邸から、水が入らない可能性が高いと（・・・）」

「吉田所長。          さん」

「はい」

「本店、          です。138度の経緯はわかっています。蒸気は200何十度ありますね。それが138度になると一旦水が落ちるんですよ。凝縮すれば確かに落ちますけれども、その結果として炉内圧力、若干上がると思います。だけれども、凝縮すれば、失われているということではないと思います」

「では、いいですか、これで」

「今の          君の話は上げる？」

「ベントを開ける前にやってしまってもいいということ。もう冷却した方がいいという話ですね」

「いや、冷却ではなくて、ベントをすることは問題ないと思われているということです」

「今、違うんでしょう、冷やすの」

「違うんです。今の方では、ベントラインできる前に減圧して水を突っ込むべきだということを斑目先生がおっしゃっている」

「その場合の（・・・）は、サプレッションチェンバの水位がそのまま上昇を続けて、現在、水位不明だと思いますけれども、ウェットウェルベントラインが埋まるということの懸念があると思っています。現在も埋まっている可能性はあると思いますが、早目にベントしないと、ウェットウェルラインが生かせなくなるというところを懸念します」

「現場から言うと、斑目先生のおっしゃるとおりだと思っていいんですか」

「違う。違うんでしょう」

「サブチェンからのベントをトライすべきではないかということです」

「だから、サブチェンからのベントを今、トライしているんです」

「ですから、炉注を継続するという事よりも、炉注は減圧してやるということを前提にベントをすべきではないかということです」

「ちょっと現場はわからないんだけど、斑目先生と所長、何が違うんだっけ。我々は、ベントは今しているわけよ」

「そういうことですね」

「それを冷やしてから減圧して注入しようとしているんだけど、斑目先生は、サブチェンからの減圧はベントラインを生かす必要はなくて、まず突っ込みなさいとおっしゃっているんですよ」

「そこは、あったんだと思うんですが、結局、最後に炉心損傷してしまった後のことを考えると、ドライウェルベントしかなくなるということに対する懸念で、先にまずサブチェンからのベントをやった方がいいんじゃないかと思うわけです」

「思うのはいいんだけど、今はもう時間がなくて」

「あっ、済みません」

「安全委員会委員長並びに保安院長並びに官邸の方から、もうすぐ操作やりなさいとおっしゃっているから、それでいいんですかと聞いているんです」

「今、要するに、残りとしては、100 ミリ + (・・・) 1,000 ミリで 1,100 ミリだと言ったら、一応、御納得はいただけたというふうに考えております」

「そういうこと。はい」

「だから、我々のやり方で認めていただいたということね」

「そういうふうに認識しております」

「それで、吉田君さ、さっきから言うと、大体、もうベント弁開いてなければいけない時間なんじゃないの」

「そうです。だから、そこを確認した。5 時なんだけれども、早くベント弁を開ければ(・・・)そこはどうなの」

「今、接続作業を行っています」

「えっ」

「まだです。待ってください」

「だから、ちょっと待ってくださいではわからないんだよ」

「できれば、可及的速やかに、5 時を待たずにやるということも視野に入れてやるということでもいいですか」

「それでやってください」

「はい。わかりました」

「福島第一の保安グループからお願いします。1 Fで手伝ってもらった柏崎のメンバーが今、2 Fのビジター室の前にいます。ビジターハウスの前で、1 Fから来た人は、呼ばれているのに入れられないということで」

○回答者 これもどうでもいい。

○質問者 ちょっと止めてくれますか。その次のページ、本店の清水社長が出てくるんで、その辺りから。

(録画部分)

「(・・・)できないんで。ただし、5時なんだけれども、5時で取るんですが、ベントラインが動作できれば、可及的速やかに、5時を待たずにやるということも視野に入れてやるということでもいいですか」

「それでやってください」

「はい。わかりました」

「許可をもらいたいんですが」

「お願いします」

「済みません。今のラブチャーベントラインの(・・・)説明します」

「今、電源を投入したんですが、動きが感じられないということで、空気側はコンプレッサー動いておりますが、空気側の圧力が平坦でない可能性があるので、今、確認をしなければいけないという状況です」

「これはどれぐらいのスピードで」

「これは圧が見えないので、動くまで待つしかないので」

「吉田さん、清水です。斑目先生の方針で行ってください」

「はい。わかりました」

「それでやってください」

「          さん、          さん、今、話聞いていた？ラブチャーベントラインは時間がかかる  
と、これはこれでやってくれ。(・・・)絶対重要だから、それはそれでやってください。  
ただし、これを待っていると、ますます燃料が危険な状態になってくる可能性があるから、  
操作の方に行くということでもいいですか」

「イエス。それでやってください」

「はい。本店の社長指示出ましたけれども、技術的に、武藤本部長、大丈夫ですか」

「大丈夫だよ」

「いいですか。もう一遍整理します」

○回答者 これは私ではないです。1 Fではないです。タカハシです。1 Fはだれも入っていない。高橋フェローです。本店です。

ここは、社長から言われたのは、何度も武藤本部長、大丈夫ですかと聞いているのは、社長を信用していないですから。技術屋ではないですから。だから、本部長、大丈夫ですかということを、技術的な念を押しているということなんです。武藤からの返事がなかったものですから。あのときはオフサイトセンターの中にいたんだよね。いなかったのか。どこに行っていたんですか。

○ 福島県内にはいた。

○回答者 勿論。このときには、ここからどこかへ移動しているわけではないと思うんです。オフサイトセンターの中のどこか、別のところにいたかもしれない。

(録画部分)

「斑目先生のやつでいいんですね」

「では、いいですか。別枠のベントラインの復旧工事は並行してやってください。その上で、皆さん、4時30分から減圧操作を開始するということで、準備できますか。大丈夫。だめだったらだめと言ってくれればいい。操作側から言うと、16時30分に操作を開始ということで、準備に来てください。(・・・)決めてください」

「(・・・)最終的に本部長にももらいますけれども、順番だけ確認したいと思います。一番右側のボードに書いてありますけれども、最初に海水から逆洗弁ピットへの運転していることを確認。これはもう運転していると思います。次が、逆洗弁ピットから2号の炉心に注入するラインができ上がったところで、④のSR弁の開操作に入る。プラスマイナスゼロで密度補正すると」

「斑目先生、そんな余裕ないんじゃないかと言っているんですよ。(・・・)がないから入れない」

「もう(・・・)やってしまおう」

「(・・・)をして、減圧操作を行います」

「何分、減圧操作（・・・）」

「ごめん、吉田さん。ベントやっている人は危険はないですか、その場所は」

「ベントのラインをやっている人は危険はないです」

「ない。はい」

「逆洗弁ピットへ」

「ないからいいんだよ。ややこしいこと言うな」

「では、指揮者はでかい声で発声してやってください。16時28分、減圧操作の指示を行いました」

「減圧操作、第一、16時28分。これはあれかな、関係箇所連絡かな。よろしくお願いします」

「済みません、通報の方、よろしくお願いします」

「通報は既に実施しております」

○質問者 今、ずっと斑目原子力安全委員長からの連絡があって、それから、しばらく電話のやりとりなんかがあって、この流れを見ると、まず、電話があったのは、42番のところからですけれども、本店の高橋明男さんというのは、フェローですか。

○回答者 フェローです。

○質問者 高橋フェローが吉田所長とお話したいというふうに言っているときに、ちょうどその電話に出ておられたとき、これがもう既に斑目さんとお話をされていたんですか。

○回答者 はい。

○質問者 最初、電話のときというのは、いきなり斑目さんが電話をしてくるんですか。

○回答者 このときは何かびっくりして、いきなり電話に出た、斑目も、名乗らないんだよ、あのオヤジはですね。声から、何かば一と言っているわけですよ、喚き散らしてですね。

○質問者 斑目さんがですか。

○回答者 斑目が。

○質問者 あの人、そういう人なんですか。

○回答者 もうパニグっている。これ、こうで、こういうわけだと言っているわけです。

何だ、このおっさんかと思って、聞いていると、どうも斑目先生らしいなと思って、はいはいという話をしている、何ですかという話をして、そうしたら、今はもう余裕がないから、早く水を突っ込め、突っ込めと言っているわけですよ。今、ベント操作しているんですけれどもという話をしたら、ベントなどをやっている余裕はないから、早く突っ込めと言っているんですよ。そこからこっちにやりとり（・・・）斑目先生とか、保安院長が隣にいたんです、多分ね。

○質問者 そのときは、保安院長とか、ほかの人が代われ代われとかと。

○質問者 斑目先生がだ一としゃべる前に、結局、メインは斑目先生と話をしたんです

が、最初、斑目さんが出てきたのではなくて、だれかが出てきたんです。それは保安院長だったか、私は忘れてしまったんですけども、保安院か、どこかの人が出てきていて、そこと話をしていたら、途中から斑目さんが名乗りもしないで、こうしろということをおっしゃって、だれだ、このおっさんはというところへつながってくるんですけどもね。どうもこの声を聞いていると、度を失った原子力安全委員長だなど、何となく声のトーンからわかったということです。

○質問者 そうすると、電話の向こうにいた面々は、2号機が非常に危うい状況だということとは認識されておったんですね。

○回答者 と思います。

○質問者 それで、早く水を入れないと危ないというところで、そういう。

○回答者 ずっと前から、要するに、1号、3号、優先しているという話をして、水がピットにないから、3号、1号だよと言っているときから、官邸が2号早くやれ、2号早くやれと言っていたわけですから、それで多分、メンバーがいて、その連中がデータを見て、危ないと。うるさいって言ってるんだよ、こっちはやりたいんだ、当たり前だと。だけれども、条件が整っていないでしょうと。ベントの話もあるし、さっき言いました凝縮するにしても、100度を超えているサプレッションチェンバで本当に凝縮するのかなとか、炉圧が下がるのか、格納容器圧力が下がるだろうから、勿論、炉圧が上がるだとか、炉圧が下がるだとかいうことも、初めての経験ですから、よくわからないという中でやっているわけですね。

○質問者 これ、流れからすると、斑目さんは今すぐにでも水を入れろということで行きますね。本店の[ ]さんが言っていたことは、結局、現場の方でやっていたこと。

○回答者 そうです。早くベント、おまえが言っていることはわかっている、こうなってしまいうんです。何を言っているんだと、違うことを言っているんだろうと、それは大丈夫かどうか聞いているんだということで、この辺は完全に頭に血が上っているんですね。

○質問者 結局、そういうので、当初はそれで、この流れとしては、斑目先生、そうは言うものの、本店と現場としては、まずベントラインをつくるのが先決だよということ、一旦そういうことでやろうという感じになっていたんですね。

○回答者 そのまま継続しようとしたんだけど、ただ、ベントがね、ここもまた[ ]が登場してくるわけですけども、どうなっているんだと言ったら、なかなかできませんという、できない話が入ってくるんで、だったら今まで言っていたシナリオ全部狂ってしまうのではないかと、では減圧するしかないのかという話をしているときに、清水社長が、技術的内容を理解しているかどうか知りませんが、やりなさいということをおっしゃるわけですね。

○質問者 清水社長は、現場にこれをやれとかいうふうに、今回の一連の中では。

○回答者 初めておっしゃったのではないですか、このとき。

○質問者 それで、斑目先生の方式で行ってくださいということだったんですね。それで、



結局、それに着手をして、16時30分前後ぐらいから減圧操作を開始すると。実際、減圧操作、その後、かなり手間取ってしまったんですね。

○回答者 バルブが開かないと。(・・・)が開かない。

○質問者 例えば、その前の経験だと、3号機などは9時8分から9時20分ぐらいの間に減圧していてということで来たけれども、結局、時系列を見ますと、18時ぐらいの段階ではまだ5.4MPaで、19時03分に0.63MPaまで一気に下がっていると。4時半からだと、7時ぐらいまでは2時間半ぐらいの間、ずっと四苦八苦して、減圧操作されていたということになるわけですね。その間は、横から電話とかなかったんですか。おまえら何をやっているんだみたいな。

○回答者 それはなかったです。あったというか、ちょこちょこことですね。ビデオは映っていないですかね、その後は。

○質問者 いや、映っているのではないですかね。

○回答者 私も記憶ないんですけども、私は何せ焦っていたんで、早く減圧させろと。S3が開かない、開かないと言っても、私自身、パニックになっていました。

○質問者 議事録の中で、見てみると、SR弁がどういう状況にあるのかというので、例えば、最初に起こる、ちょっと失敗したとか、いろいろ書いてあって、パワーが足りないとかですね。

○回答者 バッテリーのですね。

○質問者 ということは、ちょこちょこ出ているんですね。

○回答者 新たなバッテリーを持っていけとか、たしか、そんなことをやっていたと思うんですけども、バッテリー予備ないのかとか、それは私のイメージだと、現場で早く上げろ、早く上げろと横にせつついて、当直長に電話しているわけです。このとき、またややこしいのは、当直で上げるのか、保修で上げるのか、下らないことを言っているわけですよ。ばかやろう、何やっているんだと言って、上げろと言ったら上げるんだと、そういうことを言っていたような記憶があります。役割分担なんて話ではないだろうと。

○質問者 当直と復旧班が一緒に行っているようなものもあるんですけども、あれは結局。

○回答者 あります。運転員はものが正常になる状態では操作というのはできますけれども、バッテリーをつなげろとか、その辺は復旧班で、計装屋がフォローしないとできないんで、一緒にやっていくんです。操作どっちがやるんだとか、下らないことを言っていたので、激怒していたと思うんです。

○質問者 この後ぐらいに、要するに、SR弁がなかなか開かないというところから、夜に行くぐらいのころ、本店も含めてなのかどうかはともかく、実際の退避は2Fの方に行っていますけれども、退避なども検討しなければいけないのではないかみたいな話というのは出ていた。

○回答者 出ていますというか、これは、余りに大きい話になりますし、そこでうちの本

店から言ってきたわけではなくて、円卓で言いますと、円卓がありますけれども、廊下にも協力企業だとかがいて、完全に燃料露出しているにもかかわらず、減圧もできない、水も入らないという状態が来ましたので、私は本当にここだけは一番思い出したくないところです。ここで何回目かに死んだと、ここで本当に死んだと思ったんです。

これで2号機はこのまま水が入らないでメルトして、完全に格納容器の圧力をぶち破って燃料が全部出ていってしまふ。そうすると、その分の放射能が全部外にまき散らされる最悪の事故ですから。チェルノブイリ級ではなくて、チャイナシンドラームではないですけども、ああいう状況になってしまう。そうすると、1号、3号の注水も停止しないといけない。これも遅かれ早かれこんな状態になる。

そうなると、結局、ここから退避しないとイケない。たくさん被害者が出てしまう。勿論、放射能は、今の状態より、現段階よりも広範囲、高濃度で、まき散らす部分もありますけれども、まず、ここにいる人間が、ここというのは免震重要棟の近くにいる人間の命に関わると思っていましたから、それについて、免震重要棟のあそこで言っていますと、みんなに恐怖感与えますから、電話で武藤に言ったのかな。1つは、こんな状態で、非常に危ないと。操作する人間だとか、復旧の人間は必要ミニマムで置いておくけれども、それらについては退避を考えた方がいいんじゃないかという話はした記憶があります。

その状況については、細野さんに、退避するのかどうかは別にして、要するに、2号機については危機的状態だと。これで水が入らないと大変なことになってしまうという話はして、その場合は、現場の人間はミニマムにして退避ということをしたと思います。それは電話で言いました。ここで言うと、たくさん聞いている人間がいますから、恐怖を呼びますから、わきに出て、電話でそんなことをやった記憶があります。ここは私が一番思い出したくないところです、はっきり言って。

○質問者 武藤さんと細野さんは一緒にいるわけではないから。

○回答者 全然別です。ですから、本店です。武藤だったか、だれだったか、私も忘れたんですけども、そんな話ができるのは武藤ぐらいしかいないと思って、あのときですね。

○質問者 それに対して、お二方、武藤さんなり、本店側の人間に対して電話したときの向こうの反応はどうでした。

○質問者 別にどうということではなくて、そういう状況かということなんです。それでOKだとか、そうではないとかいう話ではないんですけども、私は、そういう危険があるよと、わかったと、そういう感じなんです。私の行動としては、廊下にいた協力企業の方のところに行きまして、みんな、よくわからないでぼーっと見るなりしていますから、この人たちを巻き込むわけにいかないと思って、一生懸命やってきましたけれども、非常に大変な状況になってきて、皆さん、帰ってくださいと。退避とは言わないです、帰ってくださいと。（・・・）帰っていただければというお話をして、あとはこっちに持ってきて、こっちも声なかったですよ、その時点。あとは待つだけです。水が入るかどうか、賭けみたいなものですから。それだけやったら、あとはほとんど発言しないで、寝ていま

した。寝ていたというか、茫然自失ですよ。

○質問者 それは、SR弁がなかなか開かないとか。

○回答者 開いたんです。開いたんですが、なかなか圧が下がらないところから、SR弁を開けるところはまだ操作ですから、何やっているんだ、どうなっているんだとなるんですけども、SR弁が開いたにもかかわらず、圧が落ちない。そら、見たことかと。結局、サブチェンの方が高いですからね。落ちないんじゃないかと。落ちないで、燃料がどんどん水位が下がっていつているなど。

もう一つは、余り時間がなかったものですから、ポンプが、消防車の燃料がなくなって、水を入れるというタイミングのときに、炉圧が下がったときに水が入らないと。そこでもまたがくつと来て、入れに行けという話をしていまして、これでもう私はだめだと思ったんですよ。私はここが一番死に時というかなですね。

○質問者 パラメータを見ると、減圧操作が一旦されたと見られる0.8とか、0.7とかいうところまで、3月14日の夕方に落ち込んできている。0.5ぐらいまでですね。それからまたしばらくすると、9時ぐらいですかね、8時54分とか、そのころになるとまた1を超えてきたり、また0.4ぐらいまで落ちてきたり、今度また1、2、3まで上がってきたり、ずっと一定になっていないんですね。結局、また入れなくなってくるんですね、この状況だと。SR弁で、こういうときは更に減圧をしてとかいうのを繰り返すとなるんですか。

○回答者 このときは、結局、何で圧が上がっているんだ、バルブ開いているのかという確認をして、多分、その操作をさせたと思うんですけども、何せ、ここは私の記憶から全部消したいと思うんです。ここを思い出すと、トラウマみたいなものですから。

○質問者 14日の、今のお話は夜中のお話になるんですね。

○回答者 19時ぐらいからですかね。実際はですね。

○質問者 パラメータを見ると、20時54分に1.170まで行って、そこから1.3とか、1.4とかまで上がっていつて、また21時20分に一旦0.8、0.6、0.5と下がるんですね。しばらくそれを維持していたんですが、22時50分に1.8、23時に2.07、2.65、3.15と上がってきて、また23時30分から下がってきているようですね。一旦また下がるんだけど、今度ずっと行くと、また1を超えてしまう、2まで行ってしまうというのが、夜中の零時から1時にかけてぐらいあってというのがずっと繰り返して、大体このころの時間帯の話になるんですかね。

○回答者 その前の段階で、一回下がったところはいいんですけども、下がったところぐらい、要するに、9時とか、ここで炉注ができていればいいんですけども、ここで炉注が整わなかったんで、ここで燃料を入れているんですよ。ここで一回、私はがくつと来てしまったわけです。何だ、水入っていないのかと。入っていない、燃料切れましたと。ばか言っているのではないと言って、          の頭をぶん殴ってという状態でさせたと。

○質問者 ようやく減圧して1を切った、21時とか、21時20分とか、そのころにちょう

どタイミング悪く燃料切れみたいな、そういうのがあって、またやらなかったら、また上がってくるということなんですね。

○回答者 そうです。これもどこで燃料入れて、水が入ったか、覚えていないんですけれども、その後、下がっているんで、やはり水が入ったと思うんです。水が入ったら、逆に、今度は、水が加熱した燃料に触れますから、ふわっとフラッシュして、それで圧力がぐっと上がってしまったという現象だと思っているんですけれども、また水が入らなくなる。そういう形で若干落ちてきて、そういう現象だと私は思っているんですけれども、解析をやってみないとわからないです。いずれにしても、かなりこれは損傷して、メルトに近い状態になっていると私は思っていましたから。

○質問者 14日から15日のかけての夜ですね。

○回答者 はい。

○質問者 そのときは、実際、協力企業さんたちは帰られたんですか。

○回答者 まず、廊下にいる人はほとんど帰ったと。

○質問者 当時ですと、本部に詰められている東電の社員の方々いますよね。その人たちはどう。

○回答者 本部といますか、サイトですね。免震重要棟。そのときに、■■■■君という総務の人員を呼んで、これも密かに部屋へ呼んで、何人いるか確認しろと。協力企業の方は車で来ていらっしゃるから、(・・・)。うちの人間は何人いるか確認しろ。特に運転・補修に関係ない人間の人数を調べておけと。本部籍の人間はしようがないですけれどもね。使えるバスは何台あるか。たしか2台か3台あると思って、運転手は大丈夫か、燃料入っているか、表に待機させると。何かあったらすぐに発進して退避できるように準備を整えるというのは、こんなところに出てきていませんが、指示をしています。

○質問者 それは、2号機とか4号機がああいう感じに、15日の6時になりますね。それよりももっと前にそういうふうにして。

○回答者 ずっと前です。2号機はだめだと思ったんです、ここで、はっきり言って。

○質問者 それは3号機とかよりも2号機。

○回答者 3号機は水入れていましたでしょう。1号も水入れていましたでしょう。水入らないんですもの。水入らないということは、ただ溶けていくだけですから、燃料が。燃料が溶けて1,200度になりますと、何も冷やさないと、圧力容器の壁抜きますから、それから、格納容器の壁もそのどろどろで抜きますから、チャイナシンドロームになってしまうわけです。今、ぐずぐずとは言え、格納容器があり、圧力容器、それなりのバウンダリを構成しているわけですが、あれが全くなくなるわけですから、燃料分が全部外へ出てしまう。プルトニウムであれ、何であれ、今のセシウムどころの話ではないわけです。放射性物質が全部出て、まき散らしてしまうわけですから、我々のイメージは東日本壊滅ですよ。

○質問者 それで準備は一応、最低限の人間を残そうということで考えておられて、その

後、すぐに退避というふうになっていないですね。

○回答者 それは、水を入れに行っただけですよ。水がやっと入ったんですよ。入ったという兆候が出たんで、そこで、水入ったというふうに喜んで、あとはずっと水を入れ続けるだけだということで、忘れてしまいました、はっきり言って、ここは忘れたいんですけども、余りこの時間を取りたくないんですけども、忘れてしまいましたけれども、やっと助かったと思ったタイミングがあるんです。

○質問者 それで、しばらくは。

○回答者 水を入れ続けるしかないんで、悪いけれども、あとは燃料補給してくれということで、ずっと燃料補給をお願いしてですね。

○質問者 水位は出ていないですけども、3月15日の1時10分から20分ぐらいの間以降、0.63とか、その辺り、ずっと、0.65とか、この辺はもう水が入ったというような。

○回答者 入っていると思っています。確実に入っている。

○質問者 それで、皆さん、退避せずに踏みとどまってやっておられた。

○回答者 そうです。

○質問者 そのころに、本店ではなくて、サイト内のある方のメモ書きなどによると、かなり詳細にそのときのことがなと思われることが書かれているんですけども、当時、死ぬか生きるかみたいな思いをずっとされて、やってきていて、5時ぐらいに菅さんが来られて。

○回答者 本店ですね。

○質問者 本店の方に。本店の本部のところで、テレビ会議室から映るところに来られた。

○質問者 あれはテレビ会議室なのかどうか、私はよくわかりません。本店の状況はよくわからないんですけども、菅さんが来るということで、菅さんの席を設けて、こちら側に取締役が座るような席がずっと映っていました。本店のビデオというか、テレビ会議の。その状態で、5時を待っていたような感じなんですよ。5時ではなくて、ちょっと過ぎたころだと思うんですけども、菅さんがそこにあらわれて、最初、清水社長とか、勿論、勝俣会長以下、常務以上だと思うんですが、部長もいたかわからない、私はそこは見えていないんで、本店で聞いていただくのが一番正確だと思うんですけども、いて、そこで菅さんが、何でこんなにたくさん集まっているんだと。細かい話は忘れましたが、かなり態度悪く、怒り狂って喚き散らしていたという記憶はあります。

○質問者 全部ではないんでしょうけれども、そのときの書き取った人なりの印象に残った言葉が書かれているところがあるんですけども、そういうことがあったのかどうかの確認なんですけれども、ここで、私があつと思ったのが、撤退はないとか、命を賭けてくださいとかですね。

○回答者 それは言っていました。

○質問者 そういうことを言っているんですね。その前に、今、話を確認させていただいたら、細野さんなりに、そういう危険な状態で、撤退ということも。

○回答者 撤退というのは、私が最初に言ったのは、全員撤退して身を引くということは言っていませんよ。私は残りますし、当然、操作する人間は残すけれども、最悪のことを考えて、これからいろんな政策を練ってくださいということを申し上げたのと、関係ない人間は退避させますからということと言っただけです。

○質問者 恐らく、そこから伝言ゲームになると、伝言を最後に受ける菅さんからすると、ニュアンスの伝え方があると思うんですね。

○回答者 そのときに、私は伝言障害も何のあれもないですが、清水社長が撤退させてくれと菅さんに言ったという話も聞いているんです。それは私が本店のだれかに伝えた話を清水に言った話と、私が細野さんに言った話がどうリンクしているのかわかりませんが、そういうダブルのラインで話があつて。

○質問者 もしかすると、所長のニュアンスがそのまま、所長は、結局、その後の2号機のときを見てもそうですけれども、円卓のメンバーと、運転操作に必要な人員とか、作業に必要な人員を最小限残して、そのほかは退避という考えでやられているわけですね。

○回答者 そうです。

○質問者 菅さんは、それもまかりならんという考えだったのかもしれませんが、撤退はないとか、命を賭けてくださいとか、遅いとか、不正確とか、間違っているとかが、あるいは、これは日本だけではなくて世界の問題で、日本が潰れるかどうかの瀬戸際だから、最大限の努力をしようとか、そんなのが延々と書かれてあるんですよ。ニュアンス的にはそういうニュアンスですか。

○回答者 そんなニュアンスのことを言っていましたね。

○質問者 来られたのは、閣僚というのは、海江田さんとかは来られたんですか。

○回答者 菅さんと、官房長官が来たのかな、海江田さんはあのときいたのかな、よく覚えていません。ここは、済みません、どっちかというと、私の記憶より本店にいた人間の記憶の方が正しいと思います。

○質問者 本店の人が記憶どおりきちっと勇気を持って言っていたのが一番いいんですけれどもね。

○回答者 言わないですね。

○質問者 もう少し私のことを信用してくれればいいんです。

○回答者 そのメモは、ほとんどそのようなことをおっしゃっていると思っていただいていいです。そのタイミングで、うちはうちで、例の2号機のサブチェンがゼロになって、音が聞こえたので退避しますと。さっき言った意味でですね。必要ない人間は退避しますという騒ぎが朝あったときに、ちょうど菅さんが来ているときに、テレビ会議で、その辺でとりあえず（・・・）

○質問者 2号機に異変が生じて、必要人員残して退避というような、その状況のときに、例えば、菅さんなりがテレビ会議を通じて、こっちに状況を聞いてくるとか、そういうことはなかったんですか。

○回答者 このときはそれ以上のことはなくて、細野さん、これは危ないですというか、まだ水が入る前ですね。水が入らなかったらえらいことになる。炉心が溶けて、チャイナシンδροームになりますということ、そうなった場合は何も手をつけられないですから、1号、3号と同じように水がなくなる、同じようなプラントが3つできることになりますから、凄まじい惨事ですよという話はしていました。

○質問者 それは細野さんに対して、電話でですか。

○回答者 電話しました。

○質問者 そのときは、携帯電話。ピッチか何か。

○回答者 向こうの携帯にこちらから、本店経由。本店経由というのは、うちのPHSは、■■■■という、本店を回してから■■■■を回すと一番かかりやすかった。■■■■を押してから、携帯番号の090というのが、こっちからかけるときに一番かけやすかったんで、それでかけた。

○質問者 こっちで使うのはピッチを使うわけですか。

○回答者 そうです。

○質問者 そうしたら、本店を介して、細野さんにつながって。

○回答者 そこはダイレクトなんです。本店というよりも、回線的に本店の回線につながるだけで、通話はいきなり細野さんの携帯にかかる。

○質問者 電話の相手はいきなり細野さん。

○回答者 細野さんに話した。

○質問者 細野さんは、最悪の事態ですね、それは。それについて何か。

○回答者 ああ、そうですか、所長の言う緊急事態というのはよくわかりました、ただ、まだあきらめないで頑張ってくださいということを言って、その状態だったと思います。

○質問者 細野さんは、そうしてみたときに、電話でのやりとりが多かったんだと思うんですけども、対応として、例えば、菅さんはああいう。

○回答者 細野さんは比較的というか、常に冷静でしたね。声を荒らげることもなくて、そちらの状況はいかがですかと。こちらの情報をお話したときに、こういうことでよろしいですかと、厳しいかもしれないけれども、頑張ってくださいと。

○質問者 そうですか。では、例えば、意思決定などをするに当たってとか、現場でいろいろ実施をしようとするときに、そこで混乱するなどということはないわけですね。

それで、3月15日の6時ぐらいに異変が生じて、最初は2号機の圧力が一気に低下していった、それから、衝撃音がしたということが合わさって、最初の報告のときは2号から報告が来て、2号であったんだろうという、この音と結びついてですね。その後、今度また4号の方という話も来るわけですね。しばらく人員が少なくなる。

○回答者 バスで退避させました。2Fの方に。

○質問者 このときというのは、例えば、さっきの引き続き爆発音というか、何があるかわからないから、しばらくは現場で作業とかはできないですね。ただ、注水の、例えば。

○回答者 それは、どちらかというと、ストップして何したかということ、周辺の放射線量だとか、そこをまずしっかり測れと。だから、何かあったと。何かあったから、まずは引き上げろと。一番重要なのは、放射線量が急激に増加する、格納容器が破れるということで、急激に放射線量上がるわけですから、それをまず確実に測定して連絡しろと。その値を見て、どう操作をするかとか、次のステップを決める、こういうことですから、まずはそういう対応をした。

○質問者 その後、例えば、パラメータとか、要するに、何が起こったかと。

○回答者 中央操作室も一応、引き上げさせましたので、しばらくはそのパラメータは見られていない状況です。いずれにしても、まずは放射線量がどうかということで、それが大きく変化するようであれば、またそれは考えないといけませんし、まずはそこをしっかりと見ましましょうと。

○質問者 当時はこんなのがわかっていたのかどうか、定かでないんですけども、これはどういう意味なんですか。3月16日のこの辺り、原子炉圧力がマイナス。

○回答者 データは、16日の1時ですね。2号機は、パラメータがわけがわからない状態になっていて、サブチェンがゼロからダウンスケールでしょう。圧力容器が、ドライウエルの方が高くて、サブチェンがそれより低い状態から、ドライウエルの圧力は残ったままサブチェンがゼロになって、それに引き続いてドライウエルの圧力がどんどん落ちてきた。水位はマイナスのままですね。炉圧も途中で変な値を出しているんで、逆に言うと、このブレークか何かによって、圧力計だとか、その辺の異常が起こったのかなと、こんなふうに思った。

○質問者 圧力計が仮に故障していなかったとして、圧力がマイナスの状態というのは考えがたい状況だというのがありますね。基本的にこれは圧力計が故障しているだろうと、爆発の影響で。

あと、一回退避していた人間たちが帰ってくるとき、聞いたあれだと、3月15日の10時か、午前中に、GMクラスの人たちは、基本的にほとんどの人たちが帰ってき始めていたと聞いていて、実際に2Fに退避した人が帰ってくる、その人にお話を伺ったんですけども、どのクラスの人にまず帰ってこいとかいう。

○回答者 本当は私、2Fに行けと言っていないんですよ。ここがまた伝言ゲームのあれのところで、行くとしたら2Fかという話をやっていて、退避をして、車を用意するという話をしたら、伝言した人間は、運転手に、福島第二に行けという指示をしたんです。私は、福島第一の近辺で、所内に関わらず、線量の低いようなところに一回退避して次の指示を待てと言ったつもりなんですけど、2Fに行っちゃいましたと言うんで、しょうがないと。2Fに着いた後、連絡をして、まずGMクラスは帰ってきてくれという話をして、まずはGMから帰ってきてということになったわけです。

○質問者 そうなんですか。そうすると、所長の頭の中では、1F周辺の線量の低いところで、例えば、バスならバスの中で。



○回答者 今、2号機があつて、2号機が一番危ないわけですね。放射能というか、放射線量。免震重要棟はその近くですから、ここから外れて、南側でも北側でも、線量が落ち着いているところで一回退避してくれというつもりで言ったんですが、確かに考えてみれば、みんな全面マスクしているわけです。それで何時間も退避していて、死んでしまうよねとなって、よく考えれば2Fに行った方がはるかに正しいと思ったわけです。いずれにしても2Fに行って、面を外してあれしたんだと思うんです。マスク外して。

○質問者 最初にGMクラスを呼び戻しますね。それから、徐々に人は帰ってくるわけですが、それはこちらの方から、だれとだれ、悪いけれども、戻ってくれと。

○回答者 線量レベルが高くなりましたけれども、著しくあれしているわけではないので、作業できる人間だとか、バックアップできる人間は各班で戻してくれという形は班長に。

(休憩)

○回答者 1号機のアイソレーションコンデンサー、ICが過去に動いたことがありますかというお尋ねがあつて、平成3年かな、1号機は、IC漏えいのときに行った可能性があるかもしれない。私は本店にいたんでよくわかりませんがと。その後で、[REDACTED]とか、そのときにいた人間に聞いたら、ICはそのとき動かしていないので、今回がICを動かした最初だと。実動作としてですね。試運転だとやっているんですけれども、実動作として動かしたのは初めてだと言っていましたので、多分、そっちが先だと。

○質問者 ほかの日本国内で見るとどうなんですか。

○回答者 アイソレーションコンデンサーを持っているのは、うちと、敦賀の1号機ですね。敦1も動かしたことはないと思うんです。

○質問者 聞いていない。いずれにしても、ICが動いたときにどういう挙動を示すかということについては。

○回答者 十分な知見がない。

○質問者 ビデオを今日の午前中から確認していただいて、これまでの委員長たちがいたヒアリングからの流れでずっと聞いてきているんですけれども、まず、HPCIとRCICとIC、初動のときの起動状況とか、起動可能状況と言った方がいいのか、要するに、1号機はICが動いていると。まず最初、地震直後ですね。2、3号機はRCICが動いているというところから入ったわけですね。津波が来て、どうだったかというふうになると、把握としては、2号機、3号機は変わらず、1号機のICも含めて、いずれも起動していて、HPCIについては、3号機は使えるけれども、2号機、1号機はちょっと使えないという状況になっているという感じなんですね。いずれにしても、生きているICとか、HPCI、3号機はHPCIとRCICで、2号機はRCICで、それが起動している間に次の手を準備していて、水を入れるということをしようと。それに併せて、今回のあれで言うと、格納容器を守るためにベントのラインも併せてということは、かなり早い段階からずっとそれを目指してやっていたということになるわけですね。

あとは、アクシデントマネジメントにいろいろ書いてあったものですね。昨日、ちょ

っと確認していたところの、幾つか新たに備えた機能がありますけれども、基本的に電源がないとか、そういうことで、結局、使えるところで考えると、DDFPは電源が要らないからということで、あとは2Cのところの電源を復旧させたら何が使えるのかというところでやってみたら、SLCとかCRDとかが使えるところもあるというところで、それぞれの作業を中心にしてやっておられたということですね。

まず、これは人によって話がごちゃごちゃになっていたので確認なんですけれども、1号機に関して言うと、1号機はSR弁を開いて減圧操作をするということはされていないんですね。

○回答者 少なくとも私は指示しておりません。

○質問者 やったのは、結局、2号機と3号機ということですね。

○回答者 そうです。

○質問者 あと、これは今日のお話になると思うんですけれども、官邸から直接何か連絡があったという最初は、武黒さんはあると思うんですけれども、武黒さん以外に、東電以外でということになると、これは細野さんということになるんですか。

○回答者 細野さんです。

○質問者 それは1号機の爆発後。

○回答者 1号機の爆発後であることは確かです。

○質問者 それが3月14日までの間の、3号機爆発前の間のどこかということ、はっきりしないということですね。

○回答者 いまひとつはっきりしない。

○質問者 最初に話をしたときのお話の内容とかは覚えていますか。

○回答者 それは結構覚えていまして、それもややこしかった。うちの人間が仲介して、細野さんの秘書官の方につないで、そこから、その電話を持って細野さんのところへ行って、細野さんから電話がありまして、補佐官の細野といいます、今回の福島事故に対して首相の補佐をしておりますのでという挨拶があつて、これからいろんなことで現場の状況を直接お聞きしないといけないというのは、そのときにおっしゃった。1号機の爆発が官邸に上がったのが非常に遅れて、東電からも遅れたし、保安院からも遅れたと。ある意味でその情報の伝達に信用がならぬみたいなお話があつて、こういう状況なんで、なるべく現場の状況を直接知りたいから、所長とホットラインではないですけれども、ラインを結んでおきたいと。何かあれば私に言ってくださいと。何か尋ねることがあれば、そういうところは確認しますと。ここを言っていいかどうか分かりませんが、このことについては内密にみたいな感じでおっしゃいました。要するに、余りべらべらしゃべるなことだと思ふんですけれども、そういうことをおっしゃって、お願いしますということが最初あつて、そのときに向こうの携帯番号と、秘書官の携帯番号と両方教えてもらって、何かあったらこちらに電話してくださいと言われました。

○質問者 そのときは、具体的にやる個別の原子炉の状態がどうだこうだみたいな話では

ないんですか。

○回答者 最初はなかったです。ラインをつなぎますから、何かあったらというのが最初だった。

○質問者 例えば、3月14日ぐらいになると、未明から明け方にかけて、3号機の状態が、ドライウェル圧力が500とか、そういう状況がずっと続いて、退避命令をかけて、一回現場で作業している人を引き上げさせるとか、そういう状況になって、さっきも確認していただきましたけれども、NHKの報道が流れると、ストップをかけていたのが流れると、そういうようなことの話などは、その場では出ていない。

○回答者 その場に出ていないですけども、多分、その前に連絡があった。退避するときに、向こうからかかってきたのか、こっちから言ったのかわかりませんが、状況報告したような記憶はあるんですよ。

○質問者 現場の状況ということで。

○回答者 現場の状況ですね。さっき危機的な状況ですと私は言っていましたけれども、あの前後で、こちらがちょっとトランジェントで、3号機でおかしい状態になっていますので、一応、御一報しておきますぐらいのことは言ったような、今、思い出してみますよね。そんな、ぼやっとですけども、そんな記憶もなきにしもあらず。傍証がなくて申し訳ないんですが。

○質問者 基本的に、さっきのお話だと、初期のころ、事態がどんどん変わっていくようなころというのは、何か事態に大きく変化があったときとか、そういうときは、向こうから確認をしてきたり、こちらから報告したりということは、細野さんに対してはされていたんですかね。

○回答者 どこからスタートしたかわかりませんが、ある程度、現場が急変したりとかいうときは、テレビ会議をやっている、報告した後で、こんなことがありますからということ言っていたような気がします。

○質問者 通常、正規のラインだと、それはどういうことなんですか。

○回答者 これは当然、本店の本部で共有したものを、本来であれば、さっきの話で電話をつないでいますと言っていましたけれども、ああいう形で官邸にいる担当者、保安院にいる担当者に情報がダイレクトに入って、それが向こうへ共有されるというのが普通の状況です。多分、1号機の爆発のとき、そのシステムがまだうまく働いていなくて、こっちから本店に言ったんだけど、本店からの連絡が遅れたのか、どうしたかわかりませんが、そんなところで時間がかかっていたということがあったと思うんです。

○質問者 今、思い出したんですけども、テレビ会議の最初のところに、タケグロさんが3月12日の22時59分の、これは23時と書いてあるんですね。最初のところですけども、ないですか。最初のものを出示してもらえますか。かなり長々と、愚痴から入って。武黒さんはずっとこうやって演説のようにされているんですか。

○回答者 ほとんど覚えていない。

○質問者 覚えていないですか。では、なぜこういうようなことをいきなり武黒さんが言われたかというの。

○回答者 わからないな。12日の22時。12日というのは、爆発した後ですね。1号の爆発した後ですね。

○質問者 では、スタート。

(録画部分)

「大体、首相補佐官とか、副長官みたいな人が事前の仕切りをするんですね。御承知のように、大変、民主党政権は若い人たちがそういう役になっていますから、非常に優秀な人たちだとは思いますが、視野は勿論、それなりに広さがあるんだけど、十分な奥行きというか、ためという感じがどうかというのは、正直なところ、あります。ですから、非常に皆さん、独特の雰囲気なのかなと。『イラ菅』という言葉があるけれども、とにかくよく怒るんだよね。私も6～7回どつかれましたけれども、あれから比べて、吉田君のどつきなんていうのはかわいいものだなと思います。

では、どんな判断の仕方をするかという、昨日も退避、避難の区域を決めたときに、最初は菅さんとかがあらわれて、どうすればいいんだ、どうするんだと言うわけですね。私と斑目さんで説明すると、どういう根拠なんだ、何かあっても大丈夫だと言えるのかというのはさんざん、ぎゃあぎゃあ言うわけです。多少揺れたりするんですけど、結局のところ、何もやらないよりはいいかというんで、3kmの範囲になって、夜になったら10kmになり、今日は20kmということですけど、考える軸が違うというか、スタンスが違って、それなりに合理的にものを見るところでしようということに対して、それが持っている不確実さや危うさみたいなことをすごく意識して、もしそれで違っていたらどうするんだというようなことで(・・・)こういう感じで大体、物事が決まるという状況ですね。

ですから、今回、皆さんが非常に熱心に対応して、海水を入れましょうとか、昨日のベントをしましょうとか、避難区域を決定しましょうということで、その方針について、私が官邸に行って、官邸の状況などを踏まえながら、それから、私が得ている状況の中で、斑目さんなどと調整しながら言っていることと、本部や幹部の皆さんと認識や方向がずれなくて済んだなと思っているのは、多分、皆さんの方が非常によく考えて、そういった取り組みをかなり懐深くやっていただいているせいだろうなと思います。

そういう点では、今回も最後に海水を入れるという思い切った判断で、一方、逆に水素ガス爆発が結果的には起きたということと、この2つが大変、今回の件では大きい、重たいことかなというふうに思います。このことについて、またいずれ、もう少し時間がたって、調査本部の対応みたいなのところから、もうちょっと中長期的にもの考えるといったときには、是非、改めて議論をしていただいて、この議論みたいなことについて、皆さんでよく考えた防災なり、日ごろのリスク管理なり、エンジニアリングなりに生かしていっ

ていただければなと思います。

そんなことで、今回は図らずもいろんな、政府でも、日ごろと違う官邸の（・・・いろんな政治家といろいろとおつき合いをさせてもらいましたけれども、事業者としてのものの考えみたいなことをどれほどまでに相手から見て理解しやすいというか、受け入れやすい、あるいは説得される、説得できるようなものを使うというところは、それぞれ一筋縄ではいかないんですけども、今回、大きな、官邸という、非常に閉ざされたところで、余り情報が十分伝わらない中で考えることと、こちらで皆さんが考えていることに余り大きな違和感を私は感じないで済んだということについては、改めて大変助かったなと思いますし、皆さんもいろいろと受け入れていただいたことに感謝したいと思います。

同時に、極めて隔離されて、ほとんど情報も入らない、今日も3時半に爆発があったというのは、5時半に菅さんの執務室のテレビを見て、びっくりしたとか、ここら辺は、もう少し今後のことを考えると、うまい連携の仕方をしないとカッコ悪いなというのがあります。

今後はまた個別にもお願いをしておこうかと思いますが、地震対応ということを考えていると、ああいうことがどれほど全体として問題意識の中に浮かび上がった形で理解されて、情報共有なり、対応なりができるかというのは、改めて意識（・・・）というふうに思います。ということで、大変冗長ですけども、私の今回の（・・・）大変皆さんにとっても、あの大きな大きな地震で、会社にとっては大変大きな重荷を抱えてこれからまた取り組んでいかなければいけないものですけれども、その荷の重さに負けないで、どうあるべきかということをいつも考えながらやっていかなければと思いますので、一層の皆さんの御活躍を期待しています。ありがとうございました。」

「官邸との連絡は、反省するところもあったし、それから、さっき保安院長から情報が余り来ないというコメントがあったんで、情報の在り方は明日、少し改善しましょうか」

「問題提起していいですか」

「吉田所長、どうぞ」

「今、我々プラント（・・・）言っているし、勿論、（・・・）官邸というところにあるんですけども、今、避難している人たちの中からものすごく不満があって、東京電力が説明しに来ないというか、いつまでこんな生活が続くんだと、こういうような御不満が多々出ているようで、なかなかそれに答え切れていないなど。今後のことを考えると、多分、ものすごい、我々、今回のことで鼻つまみ者になってしまうわけですけども、このタイミングで手を打っておかないと、ますますという感じがして、ただ、そこに余り人は割けないところが今、非常に困ったなと思っているんで、そういうところがある」

「それは考えてはいるんですが、立地地区の方と、それから、サイトの広報と相談させてもらって対応を決めたいと思うんです」

「ただ、サイトの広報はどっちかという、県と町と役所対応というか、プレス対応で目いっぱいになっていて、なかなか地域住民のところに行く余裕がない」

「行くのは本店で行くにしても、どこへ行っていいかわからないから、やはりそれは現場に聞かないと思ってですね」

「勿論、それぐらいのことはやりますけれども、とてもではないけれども、今のこのメンバーでなかなかできないところがある」

「立地地区と相談しますよ」

「今のことに関連して、昨日から斑目さんと暇なときにしゃべっていたんですが、今回、地震・津波というか、東電の発電所のことで、大変多くの人に不自由な避難生活を強いるということにもなったわけなので、我々として今後の、先ほどいろいろ議論があった取組み、あるいはシナリオ、いろんなことの中に、こうした不自由な避難生活をしている人たちの立場というか、避難生活をどういうふうにしたら早く終わらせることができるかと。どういう条件をつくっていくことが必要かということも視野に入れておいて、その条件づくり、あるいは環境づくりをなるべく迅速に進めていくということも必要ではないかと思いました」

○質問者 ここでちょっと切って。今、ざっと初期のころの、初期と言っても、1号機爆発後の話なんですけど、まず、ここの中で武黒さんがいろいろと雑感みたいなものを述べております。

○回答者 冗長に。

○質問者 述べられているんですけども、まず、何でこんな長々とここで武黒さんがおっしゃっておられたのか。そういう機会を設けたんですかね。

○回答者 武黒さんに後で聞いた話ですよ。このときの印象は余りないんですけども、後でお聞きしたときに、要は、地震が始まって、武黒はフェローという立場で、武藤がオフサイトセンターということで、官邸にだれか行ってくれということで、会長に指名されたのか、社長に指名されたのか知りませんが、行ったらいいんです。とりあえず御用聞きみたいな形で行って、帰ろうとしたら、また呼び止められて、結局、ずっと、11、12日と官邸に箱詰めというか、そういう状態になった。

○質問者 最初はずっと詰めているという予定ではなかったんですか。

○回答者 なかったんです。一回帰ろうとしたのが、また呼び止められて戻っていったとか、本人が言っていました。その間、ずっと菅さんに対応したり、細野さんはどうかわかりませんが、私はそこはわかりませんが、やっと落ち着いて帰って来たのがここだっと思うんです。一回、本店に、本部にですね。そこでいろいろと官邸との間で意思疎通の問題があったりしたことについて、自分の感想だとかを述べたということだったと思います。

○質問者 何でこれが出てきたかという、要するに、1号機爆発のとき、武黒さんなどが書いてあるのが、3時半に爆発があつて、5時半にテレビを見て知ったとか、先ほど細野さんが情報伝達の遅れみたいな、そういうことを言っていた根拠となるようなところが

垣間見えてきて、あと、保安院長から情報が余り来ないというコメントがあったり、最初のころは現場対応と、どうするかというところで、どうしてもそっちに目が行くと思うんですね。特に現場においては当然そうだと思うし、本店の方も初めての経験ですから、そっちの方に行って、あっ、これ忘れた、これ忘れた、どうしても後追い、後追いというので、別なところから、あれどうなっているんだと言われて、ああ、そうだと言ってやるのかいうことは、どうしても1つ2つ、完璧には多分できないと思うんですね。それがどんどん積み重なって行って、こういうような御発言になるのかなという感じもするんですが、今、一連の中で、基本的には本店が対官庁、対官邸との関係をどういうふうにしてスムーズにしていくかというところで、現場サイドからすると余り関係のない話になるんですね。現場と本店が密になっていけば、現場としては役割を果たしているわけですね。

○回答者 ですから、テレビ会議をしていますから、そこら辺。

○質問者 だから、そこは幸いにしてテレビ会議には特に機能に支障はなかったという状況なんですね。

あと、ここでもう一つ、吉田所長から問題提起がされていて、避難されている方の生活というところをおっしゃっておられるんですね。要するに、ここで避難を強いられている方々が不満がたまっていって、東電が何も言ってこないということから、更に不満がうっ積していくと、今後の発電所の立場がどんどん孤立するということになっていくので、理解を少しでも得られるようにきちんと対応すべきではないかというような示唆をされておられるんですが、これはいつごろからそういうふうに。

○回答者 避難された方がいろんな避難場所に行かれて、勿論、うちの社員も避難した中におりますから、たまたまそこに行って、何かサポートしていた人間が免震重要棟に帰ってきて。

○質問者 東電の社員。

○回答者 東電の社員。所長、ちょっと話があるんですけどもということがあって、そのときに、行ったら、避難されている方の不平不満というか、全然状況がわからないと言っていますよという話があったんで、これはいかんかなと思って、ただ、広報にどうなっているんだと、発電所の中の広報の人間に、ちゃんと密にやっているのかと言っているんだけれども、結局、広報も除染だとかの対応に入っていないし、防災体制ですね。いる人間はどちらかというと官庁だとか、連絡だとか、それでこんなになっている状態で、とても出て行って地域住民に説明するような状況にないということがあって、これは発電所でできないから、だれかにやってもらえないんで、そこは本店頼みますよと、一言で言うと、そういうことをお願いしているということです。

○質問者 これは確かに非常に重要なことだと思うんですけども、その後、どうなったんですか。

○回答者 その後、労務で地域支援室ができたんですが、その前に地域部というところが一応、広報の出せる人間、福島第二から出せる人間、あるいは本店からの人間で、いろん

な避難所の世話をする人間を決めまして、それを出して、そこで一応、住民に対して説明だとかできるような体制はつくったんです。ちょっと時間はたっていますけれども。

○質問者 時間がたっているというのは、1号機、2号機、3号機などの、次から次に事象が進展して。

○回答者 このときには、なかなかそこまで手が回っていなかったんですね。

○質問者 もうちょっと後になりますね。

○回答者 避難する方も、最初、3kmと言われて、避難場所がどんどん変わっていきますから、最初の1週間ぐらい、ばたばたしたところで、なかなか対応できていなかったんじゃないかと思うんです。私も免震重要棟の中にしかいませんから。

○質問者 今、ちょっとお話が出たついでなんですけれども、本部要員というのは女性の方は入っていないんですか。

○回答者 基本的には中には入っているんですけれども、今回のような、放射能が出て、放射線ということになりますと、なかなか残せない状況があつて。ただ、何人か出てきてくれているんですが、その人たちが女性で内部被曝をしたということで、最初、新聞でたたかれた。新聞でというより、厚生労働省ですね。彼女たちは、免震重要棟の中でものすごく重要な役割をしていたんです。いずれにしても、被曝してからは女性は勿論入れないと。

○質問者 平時は女性の方も勤務されていますね。この方々はもう異動になったんですか。

○回答者 その後、駐在という形で、人によってなんですけれども、福島県地域支援室でしたか、そこが組織としてできて。

○質問者 東電の中にですか。

○回答者 東電の中に。

○質問者 それは本店にできたんですか。

○回答者 正式に言うと本店組織なんですね。そこに、まずは駐在で行って、いろいろお手伝いしていて、7月に正式に辞令を出して（・・・）

○質問者 では、現場に戻ってきて、もとあった所属のところということはしていない。

○回答者 していない。女性の場合はですね。

○質問者 例えば、第一保全部の中に入っていた、保全部の人などは現場で作業をばんばんやらなければいけないような人たちですね。もともとは保全部にいた人も、地震・津波の後、避難をされて、そのままそういうところで働かれてということになるんですか。

○回答者 それはパターンが幾つかあつて、福島第二の安定化センターというのができましたので、あそこに所属して、ある程度技術的な仕事をそこでしてくれるような人もいますし、もっとインフラというか、食事だとか何だとか、そういうところの仕事をしてくれている人もいて、千差万別なんです。中には、地域支援室に行つて、避難民の方のお世話だとかをしている人もいます。

○質問者 その辺の世話とかというのは、国や自治体などと連携してやっている。東電だ



けということではないですね。

○回答者 ではないです。私はこっちにずっといるんで、あそこの中はどんなお仕事をしているか、よくわかりません。

○質問者 あと、1号機が爆発後、このころというのはまだ、今後、どういう進展、1号機も含めて、2号機、3号機なども、どういう事象が出てくるのかよくわからないという状況で、それが何日で収束するのか、とにかく1号機はこうやって爆発してしまったしという、この状況の中で、今後の体制というか、1つは、今でこそという話かもしれないんですが、人が線量などが増せば、1号機の経験を踏まえると、1号機のとときの経験というのは、結局、ベントを開けるときの、当直班の人たちが2人1組で3班体制みたいな、そういうことで、1回行って帰って来て、また1回行って帰って来てみたいので開けられなかった、そういうような、非常に苦しい経験を踏まえての12日の夜だと思うんです。そうすると、今後、そういう事象が生じたときに、人が足りないと。そうしたら、そういうときにはどこからそういう人員を出すとか、あるいは圧倒的に物資が少ないわけですから、物資関係についてはどこから調達をするとか、その辺りのところは、12日の夜の段階はそういう話などはされているんですね。

○回答者 していますよ。もっと前々からしていると思います。

○質問者 11日の夜とかには、もう人がいない。

○回答者 要するに、これから先、極めて緊急事態で、今、発電所はこれだけしかないし、線量が増えてきたのは11日の夜からですし、ああいう状況を見ているから、単純に言うと、放射線管理をする人間がもうパンクしてしまっているわけです。汚染区域に入って帰ってくるのをサーベイするだとか、まずは必要なのはそういうサーベymanが必要だし、それから、実際に現場で操作するのは運転員なんですけれども、これはまだ呼び集めていない運転員がいましたから、それをどうにかするかとか、あとは物資はずっと言い続けていますけれども、水とガソリンと軽油、これは必須で早く欲しいし、消防車も欲しいと、ずっと言い続けていました。

○質問者 電源なども。

○回答者 勿論、電源車、バッテリーもですね。

○質問者 恐らく、そのオーダーを受けた側、あるいはオーダーを受けて発注して、その発注を受けた側の方々からしても、すぐに行きたいんですけども、なかなか交通事情とか、聞いてみると、私、南明興産の方に、柏崎から1Fに来るときの道中のことをお聞きしたんですけども、出た瞬間、雪がわあっと降っていて、そこに消防車が行列のようになっている、要するに、いろいろなところに行かなければいけない。1Fだけではなくて、いろんな被災地などがあって、それが全国から東北を目指して行っているんで、大渋滞でということなんで、なかなかそういうところがあるんでしょうね。向こう側の都合もあるんでしょうけれども、詳しい情報は、言葉で聞いても、実際に見ていないから、現場の方としても早く来い、早く来いという状況ですね。そういう状況の中で、いろいろ見ると、1

号機のときもそうだったんですけれども、1つ、例えば、医療というんですかね、医師の手配というんですか、そういうものはお願いとかされましたか。

○回答者 お願いしました。医師に関して言うと、福島第二にうちの委託の先生がいらっしやって、何かあったら福島第二に行って、その先生に診てもらおうということで、当座はそれでしのいでいって、そのうちにJヴィレッジに医療設備といいますか、もともとJヴィレッジに医療棟があって、そこに先生を常駐させるというのが結構早い段階ででき上がった。それから、オフサイトセンターが本来、医療関係のミッションでやるんで、最初、そこにもそういう方がいらっしやったと思うんです。

○質問者 オフサイトセンターはそういう役割なんですか。

○回答者 勿論あります。緊急被曝だとか、そういうことも想定していますから、スタッフの中に医療関係の人も入っているという形になっていた。私たちの記憶では、放射線医学研究所の先生が最初からいらっしやったと思うんです。それはオフサイトセンターの人間に確認してもらえればいいんですけれども。

○質問者 2Fのおられた先生、今回、3号機とかが爆発を起こしたときにけがをされた方がいますね。線量の問題もそうですけれども、外科的な手当が必要だと。

○回答者 外科はその先生は無理です。診察して、Jヴィレッジの診療班に持っていったり、もしくは病院にということで、今でこそJヴィレッジが中核で、けがした人は磐城共立病院だとかに送る段取りが整っているんですが、当初は非常にひどくて、うちの運転員もヒアリングされたかどうかわかりませんが、彼は1号機の爆発で左腕を折ったんです。彼はその後、悲惨な思いをして東京に帰ったんです。2日間ぐらいかけてヒッチハイクしたり。汚染していますから、服を全部はぎ取られて、寒い中を下着1枚で歩いていくとか、そういういい物語があるから書いてくれと言って、メモはつくらせていますけれども。

○質問者 それは病院に行かれた後ですか。

○回答者 たらい回しなんです。それはオフサイトセンターかどうかかわからないけれども、運んで、そうしたら、大野病院に行けと言われて、大野病院も先生がいなくて、もぬけの殻で、郡山に行けと言って、郡山に連れていったら、本当は（・・・）がついていないといけないんですが、一人でほったらかされて、郡山に行って病院に行ったんだけど、そこで応急手当はしてもらったんですけれども、被曝したり、汚染しているんで、受け入れられないみたいなことになって、福島県で一泊して、そのときに服をはぎ取られたんです。下着1枚で夜道を歩いて、しまむらという衣料品店ありますね。そこのおっさんが余りにもかわいそうだということでジャンパーと何か恵んでくれて、家族とたまたま連絡がついて、福島空港から東京に切符を手配してもらって、その切符で東京に戻ってきて、それから東電病院へ行って、東電病院に行ったら、今度は放医研へ行けと言われて、東電病院というのは冷たい病院だなとつくづく思いました。いずれにしてもそんなんで、骨を折れたままですよ。そんな状態になって、私は全然そのときは知らなかったです。

○質問者 手当てはされたんですか。

○回答者 応急手当てをするまでに時間がかかったですから、血を出しながら、こんなになりながら。彼の話聞いてもらえば、当初はどれぐらいひどい状態だったか。

○質問者 ■■さんは、その後はまた現場に。

○回答者 東京に行きまして、東京で治療して、復帰して、東京でしばらく仕事をしてもらって、今は安定化センターということで、こっちに帰ってきています。

○質問者 今は元の、遜色なく。

○回答者 腕もそれなりに復帰して、普通にやっていますけれども、精神的にはかなり大変だったと思います。

○質問者 それも、1つは、当然みんな避難しているから、周りにお医者さんもないわけですね。

○回答者 いないです。

○質問者 その後、3号機とかが爆発されたときも負傷された方がおられますね。そういう方々は。

○回答者 3号機ぐらいから、負傷した人をまず2Fに送って、2FからJヴィレッジに戻って行って、そこから病院に運んだとかいうような体制が整ってきたのが、やっと3日後ぐらい。14日ぐらいですね。だから、12日ぐらいはまだそこも全然、だれがどういう責任で何をやるなどというのは全然明確ではないですから。彼らはある意味でものすごい被害者だと思います。

○質問者 そうですね。自衛消防隊の隊長をやられていた人ですね。

もう時間もあれなので、今日、4回目ということになりますけれども、一応、一通りざっと、全部で20時間近くになりますけれども、おつき合いいただいて、思い出したくないことも思い出していただいて、いろいろとお話を聞かせていただいて、どうもありがとうございます。今後、こちらは、特に私なんですけれども、本店の方だとか、あるいは国の方の人間にお話を伺う中で、場合によっては所長のお話を裏づけというか、その人たちが真実をお話ししていただいているのかどうかを見極めるために、所長にもお話を打ち返して聞かなくてはならない場合が出てくるかもしれないですけれども、その場合、東電を通じて、本店の方からお願いすることになるかもしれないんですけれども。

○回答者 結構でございますので、いつでも遠慮なく。

○質問者 済みません。また引き続き御協力よろしくお願いします。あと、多くの部下、職員の方々にこの調査に協力させていただいて、非常にこちらも助かっておりますので、また引き続き、こちらもなるべく今の作業に支障がないような形でできるように加減したいと思いますので、済みませんが、よろしくお願いします。

○回答者 こちらこそ、本当に協力させていただきます。

○質問者 では、一応、一通り、一旦、これで終わりということにします。

○回答者 わかりました。

○質問者 どうもありがとうございました。

○回答者 どうもありがとうございました。